

## 【研究ノート】

# 近世後期の捨子－豊前小倉藩と紀州藩勢州領の比較検討－

茂木 陽一

## はじめに

本稿は、近世後期の豊前小倉藩における捨子の実態と捨子に対する領主支配の様相を検討し、筆者がこれまで進めてきた伊勢地域における捨子とマビキ慣行との関連について考察する視座を得ようとするものである。

豊前小倉藩の捨子については、すでに川本英紀氏による浩瀚な検討がある<sup>1)</sup>。川本氏は、小倉藩領内の大庄屋の御用留から 480 名に及ぶ捨子に関する史料を抽出し、発見日・発見場所・性別・着類・添付物などのデータを整理されており、その中から、特に 252 名の捨子に添えられていた置手紙の分解・分類を行って、捨子を行う親たちの心理・心性の考察を果たしている。

ただ、時期的な推移、地域的な分布等についての分析結果はまだ公表されていない。そこで筆者は、川本氏が依拠された大庄屋文書の閲覧・収集を行って、それらの点についての知見を得ようと考えたが、残念ながら、すべての史料について閲覧・収集することが出来なかった<sup>2)</sup>。

限定された資料収集であったが、いちおう 408 名の捨子に関するデータを得ることができ、捨子に添えられていた置手紙のデータも 194 名分を収集できた。川本氏のデータの一部をなぞるに過ぎないが、小倉藩領における捨子の特徴をある程度は考察することが出来ると考える。あわせて、小倉藩による捨子対策や育子政策の展開と捨子の関連を見ていくことで、捨子希少地域としての伊勢国との共通性と差異性を考える視点を得ることが出来るのではないかと考え、全くの中間報告として本稿を作成した。

## 1. 明治前期における福岡県の棄児状況

### (1) 帝国統計年鑑に見る明治前期の全国棄児状況

以下の考察の前提として、明治前期における福岡県の捨子に関わる状況を見ておきたい。

表①は帝国統計年鑑所掲の府県毎の棄児人数を明治 14 年（1881）から明治 30 年（1897）迄について、全国人数と愛媛県以下徳島県までの府県別人数を並べたものである。ここで、掲載した府県の順番は、全国人数がピークであった明治 20 年（1887）の府県別人数が 100 名を越えている 14 県の 1 位から 14 位までになっている。

全国的な棄児数の推移を見ると、明治 20 年までは増加しているが、同年をピークとしてそれ以降は漸減していつている。他方、明治 20 年時点での棄児総数の上位府県は、愛媛・大分・岡山・佐賀・福岡・長崎となっており、東京や大阪はそれに次いでいる<sup>3)</sup>。

これらの棄児数の多い府県の推移もほぼ全国状況をなぞっている。

このように、明治前期において棄児数上位県は九州北部から瀬戸内地域に所在しているという地域性が顕著に見られる。

これに対して、前稿で指摘したとおり、三重県は棄児希少であるのに対し、堕胎件数がきわめて多いという特徴があった<sup>4)</sup>。

表① 全国棄児数上位府県状況

		総人数	愛媛	大分	岡山	佐賀	福岡	長崎	東京	大阪	静岡	山口	埼玉	兵庫	神奈川	秋田	長野	群馬	徳島
明治14年	1881	4958	530	618	542		363	643	298	242	314	132	161	110	104	86	93	59	91
明治15年	1882	5081	585	630	555		344	675	310	239	315	159	128	133	96	87	70	113	174
明治16年	1883	4941	604	668	554	383	364	305	314	247	313	165	111	137	92	86	63	49	73
明治17年	1884	5156	645	679	586	495	361	319	325	248	295	168	106	134	97	91	66	52	76
明治18年	1885	5467																	
明治19年	1886	5707	692	692	638	520	457	400	365	320	294	171	111	140	78	106	88	76	80
明治20年	1887	5780	699	691	625	530	476	439	320	299	272	196	117	115	108	106	96	92	88
明治21年	1888	5575	432	620	595	557	444	455	318	287	253	196	113	114	106	95	94	83	80
明治22年	1889	5349	412	578	541	555	438	449	317	253	230	183	116	101	102	101	97	89	73
明治23年	1890	5431	409	553	529	569	424	469	377	259	212	189	119	102	108	104	101	95	86
明治24年	1891	5324	405	502	493	553	405	473	390	275	190	200	119	100	115	103	103	92	80
明治25年	1892	4958	382	462	385	546	370	461	363	237	177	189	109	97	114	102	100	92	77
明治26年	1893	4873	393	433	364	554	362	463	353	234	162	195	111	97	117	90	99	81	74
明治27年	1894	4775	384	396	348	586	351	441	371	241	153	194	106	101	107	80	106	84	68
明治28年	1895	4548	342	362	318	589	329	430	370	243	136	174	101	87	98	71	106	77	71
明治29年	1896	4189	347	326	293	557	274	386	362	208	109	161	95	76	91	71	98	72	68
明治30年	1897	3740	247	273	253	554	235	364	324	182	90	138	84	75	82	67	101	66	62

\*各年の帝国統計年鑑より作成

## （２）福岡県統計書における棄児の郡別状況

棄児数の多い福岡県について、近世期の藩領域との関連を見るために、表②を作成した。福岡県統計書から明治15年（1882）と17年の郡区別棄児数を抜き出したものである。福岡県の棄児数を旧国別に見てみると、筑前国が205名、筑後国が93名、豊前国が75名となっている。ここで、筑前国はおおむね福岡藩領であり、筑後国は久留米藩領と柳川藩領、豊前国は小倉藩領と中津藩領ということになる。はじめに述べたように、川本氏の論稿では近世後期の小倉藩領で480名という多数の捨子事例を検出しているが、明治前期の状況から見れば、旧小倉藩領が突出して棄児人数が多いということにはなっていない。したがって、旧小倉藩領の棄児状況は特殊なものではなく、福岡県域一般の状態を示しているということになるだろう。

表② 福岡県郡区別棄児数推移（明治15－17）

旧国名	郡区名	明治15	明治17
筑前	福岡区	30	32
筑前計		175	234
筑後計		93	109
豊前	企救郡	24	41
	田川郡	13	14
	京都郡	11	12
	仲津郡	8	6
	築城郡	3	3
	上毛郡	16	14
豊前計		75	90
福岡県	総計	343	

（単位：人）

\* 明治15、17年の福岡県統計書より作成

## 2. 豊前小倉藩領における捨子記録

### (1) 時期的分布

表③に捨子の郡別・毎5年別件数を掲載した。史料的な問題で時期は文化年間から明治初年に限られているのだが、文化期以降嘉永期までは、全体として増加傾向にあるといえるだろう。そして、特に目立つのが、天保7年(1836)と嘉永3年・4年(1850・51)に突出したピークがあることである。

安政年間以降、減少傾向にあるように見えるが、これは史料的な問題があるのでは無いかと思われる。たとえば、後掲の付表「小倉藩捨子一覧」によってみると、文久2年について、国作手永や友枝手永の御用日記から捨子を拾ってみると1件に過ぎない。しかし、国作手永大庄屋文書には、捨子と帳外・盗物についての郡触を書き留めた「文久二年戊正月 捨子・帳外・盗物御触写 国作良平」<sup>5)</sup>が残されている。それをみると、文久2年の捨子件数は10件にのぼる。おそらく、安政年間以後、捨子の郡触については帳外れや盗物と並んで、別帳に記載されるような変更があり、そのため大庄屋の御用日記から確認できる捨子件数の減少が生じたのではないかと思われるが、この点は引き続き検討する必要があるだろう。

表③ 時期別・郡別小倉藩捨子推移

	小倉	企救郡	田川郡	京都郡	仲津郡	築城郡	上毛郡	士分	不明	合計
1805～09			3			1				4
1810～14	1	1		1	1					4
1815～19	5	3	6	4	3		4			25
1820～24	1	1	9	2	2		3	1	1	20
1825～29	4	2	5		5	3			1	20
1830～34	1	2	13	2	4	2		1	1	26
1835～39	6	5	25	9	13	5	12	1	2	78
1840～44	6		11	2	4	2	2		2	29
1845～49	3	3	13	3	14	1	2		1	40
1850～54	10	11	26	9	15	5	4		2	82
1855～59	2	3	7	6	6	4	7		6	41
1860～64	2	4	1	1	6	2	4			20
1865～70			5	1	5	2	2			15
不明		1								1
合計	41	36	124	40	78	27	43	3	16	408
1828年人数	38746		27605	14253	18699	14648	17876			131827
人数比	0.20%		0.45%	0.28%	0.42%	0.18%	0.24%			0.31%

\* 付表より作成。

\* 郡別の1828年人数は「豊前国企救郡・田川郡・京都郡・仲津郡・築城郡・上毛郡之内人数帳」(『豊津藩 歴史と風土』第1輯21頁より引用)

天保7年の状況について中村平左衛門は「別段の記」において、次の様に述べている。

#### 別段の記

一、当年夏已来格別の雨繁ニて、八月頃ハ晴天誠ニ希なる事也、依之、御作向甚異作、其上見つきと違ひ取実少ク、御引も郡中ニて六千三百石ほど被下候へ共、御取立方大ニ六ツケ敷、村々共ニ極々必至の次第也、御勝手向も益御必至ニて、知行切米渡り方、正の手取の内三歩御掛米仰付被候

一、平野屋秋札已来下落ニて、冬ニ至り三十七、八文の事ニ相成ル

一、御国札新規御刷立ニ相成ル、是ハ百文通用也

一、当年雨繁天下一統の事ニて、他国ハ格別の不作、第一長州山々大崩レ水損多ク、北国・関東・奥州の方大凶作の由、九州ハ軽キ方也、当御領杯ハ先宜キ方ニて、作向角力番付にて小結ニ居候よし、米値段当御領銀ニて百五十目位也、江戸杯ハ銀ニて貳百五、六十目、其外国ニ寄三百目ニも上り候よし、下ノ関辺も銀ニて百七十目位ニて候よし也<sup>6)</sup>

このように、小倉藩領においても天保7年に入って天候不順が続いて不作となっている状況が述べられているが、北国・関東・奥州に比べれば軽微なものであって、作方を角力番付で見れば小結位としている。

にもかかわらず、捨子が増加しているのは、単に収穫不足では無く、物価の上昇による困窮が生じているのではないか。その場合、藩札の新規増刷などによる相場下落が、札相場での物価上昇を引き起こし、それが、領民の生活を困難にしていると思われる。もらい乳でも乳の購入に頼ることが困難な状況になっていることが背景にあるのではないだろうか。

これに対して、嘉永3年(1850)・4年のものは、全国的な動向とは別に、小倉藩領内の事情が大きく影響している。小倉藩領内では、嘉永3年7月・8月と連続して台風被害に見舞われ、嘉永3年の収穫は大きく減少した<sup>7)</sup>。その影響が、嘉永3年と翌4年に現れたものと思われる。

## (2) 地域的分布

表③には、郡別の捨子件数も掲載した。408件のうち、不明分を除いた392件の捨子が捨てられた地域をみると、小倉城下は41件で、全体の10%にとどまる。それに対して、企救郡以下の6郡の捨子数は351件で全体の90%にのぼる。このように、小倉藩領では、富家の集中する小倉城下の比重が低く、在方の比重が高いという特徴がある。それでも、在方であっても在郷町や宿駅、湊町など町場化した場所への捨子を中心である可能性はある。果たしてそう言えるのかを検討するために、在方の村町で捨子が捨てられた件数別に集計してみる。町場化した町村が捨子の捨先であるならば、当然そのような町村への捨子件数が多数にのぼるであろう。5件以上の捨子があった町村は11ヶ町村、2件以上の捨子があったのは70ヶ町村であり、最も多いのは、上毛郡八屋村で14件の捨子があった。仲津郡大橋村の13件、さらに田川郡添田町の10件がそれに次いでいる。八屋村は中津街道の宿駅であり、大橋村も仲津郡の中心的村落で一部は町だてされていた。田川郡の添田町は日田街道沿いの繁華な宿場町であった。したがって、郡方であっても宿場や在町へ捨子が多く見られることはたしかである。しかしながら、一度しか捨子がない村は、全部で106ヶ村におよんでいる。小倉藩領には369ヶ村が所在しているが、捨子が1回ないし2回行われたのはあわせて176ヶ村と半数を超えている。

また、寺院に対する捨子は70件確認できる。他に社家への捨子が2件有る。408件の内72件と15%程が寺社への捨子であるから、相当な比重である事は間違いない。ただし、寺社への捨子に小倉城下の寺社は含まれておらず、すべて在方の寺社である。

したがって、捨子が行われる場所としては、城下や繁華な在町に限られるわけでは無く、特

段に繁華ではない一般村の比重が高いという特徴がある。このことは、捨子がかかなり地域的に近い場所から捨てられているという事を予測させる。地域的な共同性のカバーする範囲内で捨子が行われていることを予測させるのである。

### （３）捨子の処理方式

捨子があった場合、小倉藩ではどのように処理されるのか。前提として、小倉藩の郡政組織を略述すると、小倉には郡方役所が置かれ、郡政は郡代が統括している。郡代の下には筋奉行、代官、山奉行が置かれ、各郡は筋奉行が担当する。郡内はいくつかの手永と呼ばれる単位に分かれる。各手永は 10～20 ヶ村程度で構成され、手永毎に大庄屋と子供役、手代が置かれている。大庄屋の下各村には庄屋・方頭・組頭が置かれている<sup>8)</sup>。したがって、触達や願届は郡代－筋奉行－大庄屋－庄屋というラインを上下していくことになる。

このラインの上で、捨子が発見された場合には、次のような手順で処理が行われる。

- a) まず、捨子があれば、捨てられた家・寺院がその村町の庄屋・年寄に報告する。
- b) すると、庄屋は見分を行い、近隣に捨主がいないかどうかの探索の指示を出す。
- c) この間、捨子の拾い上げと養育を捨てられた家の者に命じる。
- d) 捨てられた家が特定できない場合、例えば、往還の根方や辻に捨てられていた場合、町と町の境の堀などに捨てられていた場合、家と家の境の溝などに捨てられていた場合、などがあるが、こうした時には、とにかく拾い主＝養育者を特定しなければならないので、村中の話し合いで養育者を決定する。
- e) 捨てられた家ははっきりしているのだが、その家や寺庵が困窮していて、捨子の養育ができない場合は、それでも捨てられた家が養育責任を負い、養育に必要な費用を村内の各戸が共同で負担する。その抛出米金によって、寺庵の場合は、檀家の中の乳持ちに乳を依頼する。
- f) 通常の場合であれば、捨てられた家＝拾い主に養育を命じた上で、捨主の探索を行い、見当たらない場合は、大庄屋にその旨を注進書にして報告する。注進書には、捨子を発見した日時と家、捨子の着類や添え物、捨子の年齢、そして書付の有無と書付がある場合は、その内容が記される。
- g) 大庄屋は、その注進書を添えて、筋奉行へ報告する。
- h) 筋奉行は郡代に報告して処置を仰ぐ。
- i) 郡代の指示により、捨主を領内全域で探索するための郡触が各筋奉行に伝えられる。
- j) 各筋奉行は、自らが担当する郡の触頭の大庄屋に郡触を命じる。
- k) 担当大庄屋は、郡触を回達し、自らの手永内の村々に郡触を示し、自村内に捨主がいるかどうかの詮議を行い、いない場合は、その旨の請書を提出するように命じる。
- l) 各村・町から捨主不在の請書が手永の大庄屋の元に提出されると、大庄屋は請書を手元に置いた上で、自らの手永には該当者がいない旨の請書を作成し、郡内の他手永の大庄屋と連名印で筋奉行に請書を提出する。

こうした流れで、関連した文書が作成されて回達され、それが、大庄屋の御用日記に書き留められることになる。

#### （４）書付の特徴

書付が添えられているのは、408 点の内の 194 点と、ほぼ半数に及ぶ。書付類を添える比率の高さは、小倉藩の捨子の特徴といえるだろう<sup>9)</sup>。

川本論文にならって書付の内容を 16 の項目に分類してみた。表題、頭語、捨子名、出生日・年齢、捨子理由、場所選定理由、依頼文言、産土社、身分由緒、姓、短歌、結語、捨主名前、宛名、日付、その他の 16 項目である。川本論文では 252 通の置手紙データが採録されているが、本稿では 194 点のデータなので、若干の変動はあると思われるが、16 項目中の第 1 位は出生日・年齢の 95.9%（川本論文でも 1 位）であり、第 2 位は依頼文言の 53.6%（2 位）、第 3 位が産土社の 45.4%（4 位）、第 4 位が捨子理由の 42.8%（3 位）、第 5 位が日付の 32.0%（6 位）、第 6 位が結語の 29.9%（5 位）となっている。川本論文と比べると産土社と捨子理由の順位が入れ替わっているが、ほぼ同じような傾向となっているので、書付に記されるのは出生日・年齢、依頼文言、産土社、捨子理由が基本であるといえるだろう。

出生の日付が記載されている理由はどこにあるのだろうか。明治前期の長崎県の棄児についてみたところでは、出生日時の記事は、恤救米の受給に関わっているからだと推定される<sup>10)</sup>。小倉藩の場合も、後述のように、窮迫家庭の児童保護政策として養育米を 7 歳迄年 8 斗支給する制度があったから、この適用を受けるのであれば、当然に出生日時は届け出る上で不可欠であるが、捨子にこの扶持米が支給されることはおそらく無かったと思われるので、領主による扶持米受給を理由とするものではないだろう。となると、人別改などに年齢、出生年月を記す必要があることが背景にあるのではないだろうか<sup>11)</sup>。

#### （５）捨子の理由

書付から捨子をする理由を拾ってみると、一般的に困窮しているという理由以外では、母親を喪ったという理由が非常に多い。この場合は、父親が捨主と想定できるが、母親が喪われて、かつ、捨子が乳児の場合にただちに生じる困難は、乳の問題である。

書付の全文が掲載されている場合は、捨子をするに至った理由が示されているケースが多い。408 件の捨子事例で、書付が確認できるのは 194 件であるが、その内捨子をする理由を示しているものは 83 件あった。表④「書付に記された捨子の理由」にその理由を示したが、そのうちの 43 件は、死去したり、病気だったり、離縁だったりして、母親を喪っているということが理由となっており、半数以上が母の不在を理由にしている。そのほかには、貧困・困窮、あるいは父親が死去して暮らしが成り立たないなどがあるのだが、母親の不在を理由とするものが圧倒的である。

付表に示した捨子の出生後月数を見れば、生後 1 年未満の乳児が圧倒的である。したが

って、乳の確保は何よりも重要であるから、母親の不在はただちに子供の生存に関わってくる。捨子番号 219 や 386 の例では、もらい乳によって当面を乗り切っているが、386 では「是迄もらいちゝ仕候間、養内々仕候得共、何角不如意ニ付」とあるように、もらい乳になにがしかの費用を必要とする場合には、貧困・困窮が加わることでもらい乳ができなくなり、捨子をせざるを得ない状況に至ると考えられる。

表④ 書付に記された捨子の理由

捨子番号	理由	捨子番号	理由
17	無母	250	此子之母親当月上旬ニ死去仕候間、養上兼申候ニ付、
23	くれぐれ甚難澁とおよひ、この子そでたかね	254	初此親殊ノ外困窮仕、其上母親二月中旬死去仕候ニ付、致方無御座候間
28	母相果申候、	258	生之庭ニ而母死去仕候分登育相成難候ニ付
55	親ニ分、甚南儀ニ及、	260	右之女子当月出生仕候間、母親産後殊之外大病ニ而、七月三日相果候、右ニ付当惑ニ相成、
69	此子母ニ後レ候へハ、命続き難、ともに難儀仕候間、	263	母無御座候ニとおよひ、
75	不如意ニ付、登育難仕仕御座候	266	此男子両親ニ別、其上ニ付、
98	此子辰之十月生、同十二月、母間はて申候所、甚なんき仕候、	269	右者適合相別れ、殊更凶年ニハ相成、何分登育之儀出来難候間
100	母親失ひ候	270	当五月中旬母親死去仕候、是迄登育仕候得共近來ましく相訂候間、登育出来不申左候へハ此子上死ニも相成候ニ付、
108	庭て母死去仕候、男吾人ては甚難澁仕候間、捨子仕候、	272	然ハ母生おとし三日ニ死去仕候ニ付、よんどころなく此子吾人御願申上候
109	おやなし	277	故て登育致候事甚以六ヶ敷御座候故
110	ははがひよき	281	母親十月八日相果て申し候間
120	みなし子ニなり候間、	284	誕生仕り候後母死別仕候、
122	登育致得不申候間	286	此小兒不離者二候得者登育差廻捨居申候間
123	無儀次第ニ而登育難相叶候ニ付	295	然る所余儀無ク脇方へ故留筋出来仕り、
129	然ハ女をや無御座候間	297	母にしなれ、且つ戌六月水そんにかかり申候に付、甚だ以て二方人子共老人方老入三ツきよ代々小共手に付、今日は甚だ以てかつ命におよび申し候所老人御ひるい上げ下さるべく候、
131	去冬母をうしない、男子之手ニ而そでてきり不申候ニ付、	299	当正月父親死去に付、年病故困窮母吾人中々力に及ばず、其の上吾人の老母を持ち、中々登育成り難、……一人御助け遊ばされ下さるべく候
133	二親共ニ御座候へ共、てて親風しつ而難儀仕候ニ付、	300	うまれ候てちも無く、めし計り只今にては三ぜんたべ……凶年に付、親病氣に付、極々難澁に御座候ゆえ、
139	女親無之候故、登育出来不申候ニ付、	302	亥正月廿九日母死に、たすけ□□□
140	母無し子之事ならバ	303	母親死去致し候、甚だ難儀に御座候所
147	困難ニ而達世出来難候間	304	このご御たすけ、おやなし子あり、
150	此子両親相果申候間、我々はこくみ申かね候ニ付	308	此の子男親御座無ク、幼少の兄弟共多く、登育方出来申さず、
151	父小田何某、藤原姓、母同姓、吾名付有之候ニ付、其密子若同姓相知候テハ先祖代々相続之知行令亡滅、猶不忠不義之次第ニも押移、恐 君處、無余儀厄井相繼	311	なんぎにひかされてすつる
171	故有之、登育難仕候間	312	百姓倒れ
174	母親長々病氣ニ而相果、誠ニ難澁ニ有之候間	314	此のご母親病死仕り登生致し難きに付
183	登育難相成候	316	母親先月廿五日相はて申し候ゆえ、何分私当わく仕り候て、
185	極々難澁之両親ニ而今日登育方出来不仕候ニ付、	317	右は男親へはなれ登育方出来成り難きに付、
193	母親無御座候、難澁仕候	330	近來不仕合せに付、猶又子供数多く御座候間、一向致し方御座無ク候、
202	全母親産後死去仕、男の手ニて者登育難成奉存候間	351	拙子ごと故有浪々の身と生り候のところ、老親男女子多数候て目暮生活乏しく、遠方に暮れ候のところ、小兒難登育相成り難くに付、悲しくも御政道に背き止むを得ず御頼み申候……三月廿三日小兒誕生、四月廿八日妻死去
207	女者相果候なり	369	右は当三月二十八日出産仕り、今月五日母親死去致し候に付、何分登育の仕方御座無ク候故、よんどころ無ク
219	母産後病氣等仕候、相果申候付、是迄もらいちゝ仕候間、養内々仕候得共、何角不如意ニ付、そでて得不申候	370	女親三月廿一日に死去仕り候、男親老人御座候えども、老人にては世話出来申さず候間
223	此子母親はなれ甚難澁、	372	片おやなきうれゆえ
224	随分出生正敷候得共、父親短命故、	380	親ハ片親
225	右者、きつと二はなれ、かんなんくしるみニ至り候て	381	母をや二はなれなん十二つき
227	尚々、女親出産後より気分相勝れ申さず候に付、うちとても御座無ク候間、	384	此女子身之上極々之わけから寄そたてかた相成かた、誠ニ当惑ニおよひ数々心配致候へ共いたし方無御座候ニ付
232	両親共御座無ク候て、甚だ以てそでて難儀候間、……殊の外ひん家暮らし候えども	386	此子母親死去いたし、是迄もらい乳仕候へ共、何分ニもそでて時不申
234	私共何敷立行之儀六ヶ敷御座候間、	391	女おやがしんで候、
237	難儀者兩人御座候間、当二月五日此子産落シ、露に母親死去致し候後、男親はこくみ衆、右同人此子捨置欠ヲ知致、行方相不分、極々不仕合乃者ニ付、	395	五月二日出生に御座候間、間もなく父病死仕り、何分子供数御座候間登育仕り難候間
239	母者産之場ニ而死去仕、私も殊之外難澁之身柄ニ付	396	私難澁につき
240	女親無御座候ニ付、ちち親一人そでてがたし	398	母おやしきよ致し候に付
241	此子当年母親に別れ及難澁、	402	其の後、此の子母不離に付、登育相成り難候に付、よんどころ無ク
242	身貧にして母之登ふへ相成かた	404	父親武拾子、母親これ無ク、
245	母たる者ニ御座候へ共、母たる者産の難儀にて相果登育相成不申、難澁の身元にて多くの子供の事なれハ人類にてそでたかた、うへ死にもおよぶべく歎かしく故		

\* 付表より作成

## （６）産土社記載と被差別民

川本氏は書付の内容から捨子が穢多や非人などの被差別民の子供では無いことが強調されていたことを明らかにされた。事実、身元がはっきりしない捨子は穢多身分に預けられる事例が確認できる。安政４年１月１１日、京都郡与原村の南端の往来脇に４才位の男子の捨子があった（捨子番号 358）。与原村の惣作が早朝に発見して稲家に運んで食事をさせて、庄屋に報告したのだが、「衣類も裂破れ身体も瘦衰へ、乞食体の者と相見へ……野外ニも捨候義ニ付、旁以乞食体の者ニ相見候間、誰以引受養育仕候者無之」と、惣作も含めて、誰も引き取って養育しようとする者が出てこなかった。困惑した庄屋は大庄屋の中村平左衛門に対して「右体の者ニ付、食料相添穢多・非人共へ差預候てハ如何哉の段」を内々に申出た。平左衛門はその旨を役筋（筋奉行）へ飛脚で伝えたところ、役筋からの返答は「近村迄も得と詮議の上相分不申候ハ、食料相添穢多共へ預ケ候様ニ」とのことであった<sup>12)</sup>。捨主の探索を行った上で、見つからなければ、穢多に預けろという指示である。この捨子は結局仲津郡宮市村の穢多へ食料を添えて預けられることになった。このケースでは、乞食体で身元が判然としない捨子を引き受ける者がおらず、そうした場合は、穢多の者に預けられるということがわかる。

こうした乞食体の者で由緒も分からない様な捨子で、引受養育する者がいない場合は、穢多に引き渡すことが慣行化されており、郡役所もそのような取扱を了承しているという事がわかる。捨子の書付に由緒正しいことを強調したり、産土社を記載するのは、このように穢多身分に預けられてしまうことを忌避するためであると考えることができる。

## （７）捨子の養育

408 名のうち、不明分を除いた 344 名についての生後から拾い上げまでの日数を見てみると（捨てられてから、発見されて拾い上げられるまでに日数が経過している事例がいくつかあるので、拾い上げられた日までで計算している）、生後 1 ヶ月以内の新生児の状態で拾い上げられた事例が 45 件（13.1%）、1 ヶ月以上半年未満が 167 件（48.5%）、半年以上 1 年未満が 59 件（17.2%）、1 年以上 2 年未満が 43 件（12.5%）、2 年以上が 30 件（8.7%）となっている。1 ヶ月毎の事例数を見てみると、6 ヶ月目以後は顕著に減少していつているので、だいたい生後半年までに捨てられるケースが基本だと思われる。

生後 1 ヶ月未満の新生児の捨子は、墮胎の失敗の可能性もあり得る。つまり、最初から産んでそでてるつもりは無く、墮胎を行おうとしたが、それが失敗した場合に、墮胎の代替として捨子をするというケースが考えられる。

しかし、前掲の表に示した捨子の理由が書付に示されている事例には、新生児を含む 1 ヶ月未満の捨子事例が 20 件あるが、このうち、母の死亡や病気、離縁などにより乳の確保が出来なくなった事例が 13 件に登っている。ここからすれば、出生後すぐの捨子であってもやはり、養育が困難な事態に至ったために行われたものであると考えるべきだろう。

捨子先にはどのような特徴が有るのだろうか。寺院に捨てられている例、都市の富家に捨て



られている例などが考えられるが、小倉藩の場合、小倉城下への捨子事例は決して多くなく、在方への捨子事例が圧倒的である。この場合、在方であっても在郷町や宿駅など繁華な場所への捨子が考えられるが、前述したように特に繁華とはいえない村への捨子も少なくない。

捨子が捨てられた家、もしくは寺の場合は、その家や寺が養育することになっているようである。もし、その家や寺が困窮していて、養育能力が無い場合でも、村方の各戸がそれぞれなにがしかの養育米を拠出して、育てさせるようである。237 の仲津郡徳政村の庵地への捨子の場合、庵主もその日暮らしの者で養育が困難であることから、村民の評議により 14 軒から米 5 合宛を拠出し、乳も方々から提供されている。296 の田川郡金国村の捨子が捨てられた與平後家の家は、3才の女子と母親がともに病身で困窮していることから村方が拾い上げて養育することになった。

捨てられた場所が、往来であるとか、村はずれであるとか、橋の下であるとか、養育者を特定できないような場合は、村民の中から適当な者を養育者として選定するようである。211 の八屋村の捨子は橋の下に捨てられていたが、評議の上で勝兵衛の養育にしている。60 の企救郡金田村の捨子の場合、田中の溝の中に捨てられ、田の水手当に通じかかった儀助に発見された。この捨子について、とりあえず、儀助の家で哺乳をさせたが、野中に捨てられていた捨子の扱いについては大庄屋の指示を仰いでいる。また 256 のケースでは、東川崎村地内の通り筋に捨てられていた捨子を真崎村の儀七が見付けたのだが、儀七が養育者になる訳ではなく、東川崎村の養育となっているから、捨てられた場所が養育者の決定要因である。

## （8）捨子と養子

捨てられた家が、とりあえず養育を引き受けたとしても、しかるべき仲介者によって養子先を見付けて引き取られるというのが、一般的な流れなのだろうが、小倉藩の捨子の場合、養子に行ったことが確認できるのは、わずかに 2 例しか無い。安政 2 年 3 月 5 日の築城郡松江村上圓寺へ捨てられた男子が 2 ヶ月後に、宇島の十吉後家が養子にもらい受ける申し出をした事例と（捨子番号 337）、明治 3 年 2 月 8 日に仲津郡大橋村で彦右衛門が拾い上げた捨子が 3 日後に、同じ大橋村の茂助方に貰われている事例（捨子番号 408）がある程度である。

自家で養育が困難な場合、仲介者なり村町なりの斡旋で養子に出すという事例が見られないということは、小倉藩領では捨子を養子にしないのが一般的である可能性がある。その背景には、後述するように小倉藩の捨子対策の中で、捨子を養育したとしても、その家の相続はできず、名子として扱われるということが規定されていることがあるのではないだろうか。捨子を養子として引き取る場合、いかなる目的で養子とするかといえ、それは、家の継承者としてというケースが一般的であると思われる。にもかかわらず、小倉藩の場合は、家の継承者になることはできず、成長して以後も名子として、一段低い身分に押しとどめられるので、養子として引き取ることのメリットが存在しないのである。

### 3. 豊前小倉藩における捨子対策

#### (1) 流産禁止と養育米制度

文政6年(1823)8月、小倉藩は次の様な触達を出した。

覚

一、御郡中六郡之もの共、夫婦有子供多く難渋之上、又々懷妊致シ候歟、或は無拋沢ケ合ニ而野合同様之妊孕有之候節、流産いたし候ものも有之候而者、甚以無慈悲の次第ニ候、此段堅停止申付候事

一、右之通停止之上、養育ニ差間候義も可有之ニ付、成長迄撫育之扶持方可被下候、請人相立、村役之者吉願出候上、請取可申候

一、右流産停止之趣意、天道人倫之道相弁へ、他人吉深切ニ致世話候もの有之ニおいてハ、大庄屋・小庄屋申出次第、委細之訳合不及吟味、貞実之名目を以、御褒美可差遣候事  
右之通役方之者能々世話方可致候、若不行届天理ニ相背候義有之候時ハ、役々之者并五人組之者咎申付候

文政六年 杉生十右衛門

未八月<sup>13)</sup>

この触達の中で、流産といているのは堕胎のことである。これは、したがって堕胎禁令という事になる。野合によって未婚のまま妊娠した際に堕胎が行われることを防ぐために、村役人による監視を強めると共に、未婚のまま出産した場合に、産児に対して扶持米を支給するというものであった。これ自体は、農村部における人口減少を押しとどめようという方策であり、この流産禁止と難渋児に対する扶持米支給は、以後毎年春先に繰り返し触れられている。

3年後の文政9年(1826)3月10日には、筋奉行から各郡の大庄屋に対して、この産児養育米についての次のような詳細な規定が回達された。救荒対策として規定された稗困の運用の一環として、養育米の抛出が定められたのである。

稗困之義は、若も凶年飢饉之節、銘々ニ御救ニ被下候義ニ付、明地其外余力可相成丈作り増し、御用意ニ相立可申候事

但、凶年之節ニ而も御施行不請候程之身体之者も、右体御仕恵之御加勢仕候ニ付而者、切徳ヲ以益長久可致候之事

一、子供養育之義は、御郡中御趣意之通り追々養立候ものも有之、此度御扶持方御褒美等被下之義、尚御趣意ニ相叶候様可相心掛事

一、右御扶持方は、其年之秋ニ庄屋吉手形差出シ、受取可申候、若も小児不幸之義も候ハハ、早速届出可申候

一、出生之小児名、後年見合之為ニ候得者、男子は下ニ仁之字相用、女子は下ニ女之字相添可申事

一、男子名たとへは 富仁(トジノ) 安仁(ヤスジノ)

一、女子名たとへは かね女 よし女

但男女共ニ上ノ字ハ勝手次第可相用候

右之通可相心得旨、御郡中へ無洩落御申触可有之候、以上

戌三月十日 杉生十右衛門

(筋奉行七名)<sup>14)</sup>

この規定によれば、扶持方（養育米）受給が認められた者は、秋に庄屋を通じて手形米を受取り、子供が死亡した場合は届け出る。そして、扶持方を受給する小児に対して、男子は仁、女子は女の字を名前に付けることで、養育米受給者である事を明示させるように命じている。こうした養育児に対する差別的な取り扱いは、当然養育児の側からの不満となったため、安政4年には廃止されている<sup>15)</sup>。

扶持方支給の実績を調べるために、文政10年12月には、各手永の養育の子供の村名・氏名・年齢を書き上げて提出することが求められた。この際の調査では、企救郡に養育子がないことが問題視されているが<sup>16)</sup>、天保6年(1835)には6郡合わせて33人、天保11年(1840)には43人、天保13年(1842)には46人、弘化元年(1844)には45人に扶持米が渡された<sup>17)</sup>。

## (2) 捨子対策

以上のような育子政策と並んで、捨子に対する禁圧的な政策が天保期から強化されていく。

すでに、元禄3年(1690)、小倉藩は幕府の捨子禁令にならって、捨子の禁止を規定していたが、その後、捨子に対する目立った政策は行われてこなかった。しかし、天保2年(1831)9月、小倉藩は捨子の多発に対処するために次の様な触を出した。

御請書覚

御郡中捨子仕候者は、稠敷御吟味之上、捨主相知れ候得者、当人は勿論、五人組之もの共迄も急度御答被仰付、捨子之義は其家相続不相成、成長之上ハ名子同様召仕候様、尤名子百姓之家ニ捨候ハ、右同様相心得、名子百姓之下手ニ仕、向後人別帳ニも其差別相記、差出候様被仰付奉畏候、尚又子供多難渋之もの、又は無余儀次第ニ而子供出生仕、養育難仕儀も御座候ハ、有体を以申上候様、御扶持をも可被仰付段、御触書之趣逐一承知仕、重畳難有奉畏候、仍御請書差し上げ申候、以上

卯九月

国作手永 15ヶ村百姓惣代・方頭・庄屋の名判<sup>18)</sup>

これによれば、捨子を行った者は厳しく取り調べ、当人のみならず、五人組の者に対しても処罰を加えること。また、捨子は拾われた家を相続できず、成人しても名子同様の扱いにすること。名子百姓の家に捨てられた場合は、名子百姓の下位に位置づけること。これらを人別帳にも記載することを命じた。こうした捨子に対する差別的取り扱いを命じつつ、難渋百姓に対する扶持米支給についても触れているが、捨子に対する扶持米支給を認めたのかどうかは判然としない。捨子を禁圧しようとする小倉藩の姿勢からすれば、捨子に養育米を支給することは考えにくい。この触で養育米について触れているのは、捨子をしなければならないような困窮

した親に対して、養育米支給の道があるので、捨子をしないようにというメッセージと考えるべきだろう。

このように捨子を成人後も下位の身分に位置づける政策は実際に適用されていたようである。安政2年(1855)2月12日に仲津郡綾野村の伝兵衛に拾い上げられた捨子について、筋奉行の三宅圓司から、「綾野村捨子成長之上荒仕子ニ召使候歟、又者名子百姓等へ差遣候節届出候様可被申付候、以上」という指示が出されている<sup>19)</sup>。捨子が成人した際に荒仕子として召し使うか、名子百姓の養子に出すかした際に届け出るようにということであるから、天保2年時の捨子対策は安政年間にも維持されていたのである。

天保4年(1833)10月の触では、元禄3年の幕府による捨子禁令を再令して、さらに捨子禁制の強化を示している。

捨子之義ニ付、別紙御書付之通、尚又此度被仰出候間、堅可相守候、既ニ去ル卯歳御役筋方相触候次第も有之候得者、役々之もの共ハ勿論、人別其趣意不相弁者ハ有之間敷事ニ候所、心得違之もの有之哉、間々右体非常之取計致、不屈之至候、向後忍ひ廻り之もの差出置、遂穿鑿、捨主相知レ候ニおゐては当人は勿論、其村役々・五人組并隣家之もの共ニ至迄急度咎方可申付候条、此度被仰出候御趣意相弁、相互ニ心を付、右体之次第無之様可致候、尤致見聞候もの有之候ハ、其段其筋え申出候ニおゐては一廉褒美可差遣候、若役々え申出候而も等閑ニ致置候ハ、其筋え不相拘、直ニ郡方役所江可訴出候  
右之趣御郡中村々人別触方行届候様、堅御申付可有之候、以上

巳十月廿六日 奉行所方筋奉行ニ当ル<sup>20)</sup>

今後忍び廻り(密偵)を配置して、領内を探索し、捨主が発見されれば、当人のみならず、村役人・五人組・隣家の者に至るまで処罰を加えるとし、捨主やそれを知りながら等閑にした村役人の密告を奨励している。

そうして、この時に配置された密偵による捨主摘発は早速効果を発揮する。

天保8年(1837)6月26日夜に企救郡高槻村の源次郎方へ捨てられた子供(捨子番号152)の捨主が、同郡大里村の三七であることが判明したのである。本稿で取りあげた408件の捨子事例の内、捨主が判明しているのは僅か2件に過ぎないが、その一つが、この一件であった。

そうして三七に対しては「依之三七儀、両鬚剃落、六郡中引廻、晒之上入牢申付候」<sup>21)</sup>という処置が言い渡された。この処罰には五人組の者も連座させられている。

8月29日に郡方役所より、関係町村に対して引廻の先触が出された。それによれば三七は両鬚を剃り落とされ、五人組の者達は綱でつながれて引きまわされることになった。郡手代・子供役が差し添えとして同行し、引廻のルートは図「三七の引廻しルート」に示したとおりである。往路は、小倉城下に隣接した篠崎村から始まり、企救郡内の片野・徳力・呼野を通して、田川郡に入り、田川郡内の香春・添田・油須原を通して、石坂峠を越えて仲津郡に入る。中津郡内では、大村・花熊・天生田を通して、中津街道沿いに南下して国作に入り、そこから築城郡の

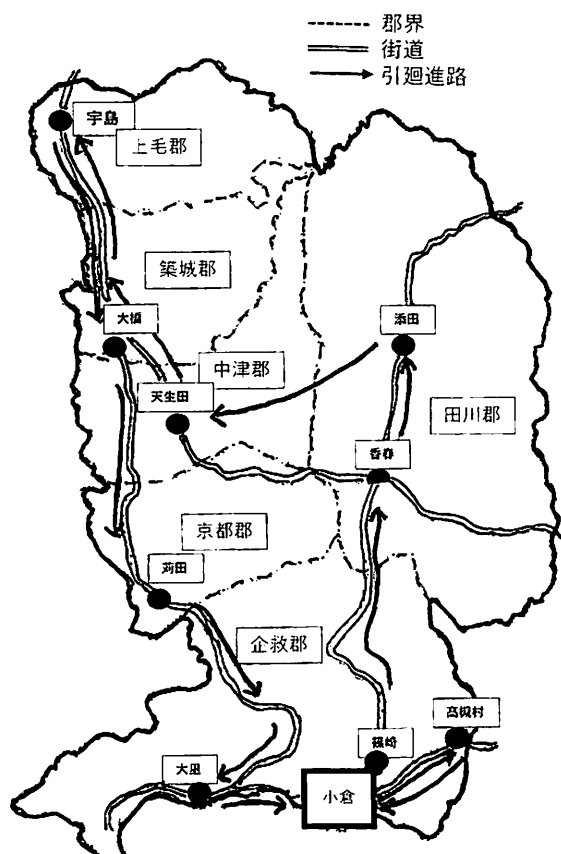


図 三七の領内引廻ルート

＊「豊前小倉領全図」(『豊津藩歴史と風土』) 第一輯所載) より作成

築城・椎田、上毛郡の八屋・宇島まで進む。帰路は、そこから、中津街道沿いに北上していき、仲津郡大橋村を経て、京都郡の荊田を通り、企救郡に入って下曾根から今津を経て、捨主である三七の居村の大里村へ至る。そこから門司道を通して小倉城下に入り、清水町を抜けて、捨子があった高槻村に至る。そして、高槻村からは篠崎・片野を通して萩崎に至って引廻が終了する<sup>22)</sup>。萩崎には徒刑囚を収容する揚がり屋があったので、三七は揚がり屋で徒刑に服したのだと思われる。文字通り、小倉藩領内をくまなく引廻しており、捨主のみならず、五人組の者も一緒に引きまわされるという過酷な処分が行われている。こうした処罰が捨子に対する抑止効果を持ったのかといえ、捨子の時期別発生状況を見れば、必ずしもそうはいえなかった。むしろ、捨子の捨主が分かっているにもかかわらず、捨主の所在を領主に報告しないという対応を在地に取らせていた可能性が高い。

このように、天保年間に至って、小倉藩は墮胎を禁止し、養育米を給することで農村部の人口増加を図る一方で、捨子については、厳しく取り締まるという体制を作っていた。

おわりに

以上、小倉藩における文化年間以降の捨子の事例について、小倉藩の育子政策・捨子禁圧策との関連に注目しながら検討してきた。そこから、三重地域の捨子事例の分析に資する論点として、次のような点を確認することが出来るだろう。

第一に、捨子が行われる場所としては、城下や在方の繁華な町場に限らず、広く在方での捨子が行われていた。

第二に、文化年間以降、捨子の件数は増加傾向にあり、特に天保7年、嘉永3年のように飢饉や災害の被害が大きいときには突出したピークが生じていた。

第三に、小倉藩領の捨子には書付が添えられ、そこには捨子の年齢と産土社が記載されるのが一般的であった。後者については、捨子が被差別民ではないことを示す意図から記載されたとされる。

第四に、捨子をする理由としては、一般的な困窮のみならず、死亡・病気・離縁などにより母親を喪った場合の比重が大きかった。

第五に、捨子を拾い上げた家には養育責任が課せられるが、特に困窮している場合には村方からの援助が行われた。

第六に、捨子を養育しがたい場合に養子に出すということが少なかった。

このような特徴を観察することができたが、第三、第六の点は、小倉藩の捨子対策との関わりから生じている可能性が高いと思われる。小倉藩領においては、身元が判然としない捨子については穢多身分の者に預けられるという措置が藩の指示の元に行われていた。そのため、捨子が被差別民の出自ではないことを示すための産土社記載が一般的になった可能性がある。

また、小倉藩の捨子対策は、捨子に対する保護を中心とする幕府の政策とは異なり、捨子防遏を図るために、捨子の身分を名子百姓以下のものとしたり、捨子を養育する家の相続を認めないなど、捨子自身に多大な不利益を課すようなものであった。また、捨主に対しては、六郡引廻の上での徒刑を課したり、五人組まで引廻を行うなどきわめて過酷な処罰を行うなどの特徴を持っていた。こうした措置は、当然捨子を行うことに對しての抑止効果を期してのものだったが、それでも嘉永期のピークに見るように、そうした抑止効果は十分には機能していなかった。

三重地域の捨子事例を検討していく上では、捨子に対する乳の問題が浮かび上がってくる。出産後に母が死亡したり、病気になったりして乳を提供できなくなる事態は三重地域でも当然に生じてくるはずである。それを補うのがもらい乳ということになるのだろうが、そのもらい乳が何らかの代価を必要とするのか、あるいは共同体によって無償で保障されるのか、ということが大きな検討課題になるだろう。神宮領の場合には、捨子の養育に必要な養育料を共同体によって負担していたし、紀州藩勢州領の場合は、富家への捨子の場合、乳を含む養育料は富家が負担していた。小倉藩領の場合に、そのような機能が十分でなかったことが捨子の増加をもたらしたのだとすると、富家や共同体のあり方の違いとして見る事が出来るのかどうかを検討課題となってくるだろう<sup>23)</sup>。小倉藩領の事例で収集できなかった部分を含めて、検討課題としたい。

【付記】本稿は jspс 科研費 jp19k00961(基盤研究(c)研究代表者大杉由香「子どもの命と人権に関する地域史研究—近世・近代・現代社会の連続面と断絶面を考える」2019-2021 年度)の成果の一部である。また、国作手永大庄屋文書の閲覧・撮影の御許可をいただいた行橋市歴史資料館に謝意を表したい。

## 注

- 1) 川本英紀「捨子の置手紙と『氏・筋・由緒』」(『部落解放史・ふくおか』116号、2004年)
- 2) 川本氏が依拠された史料は、仲津郡長井手永大庄屋文書、国作手永大庄屋文書、築城郡安武手永大庄屋文書、上毛郡友枝手永大庄屋文書であるが、それらの内、閲覧することができたのは、行橋市教育委員会所蔵の国作手永大庄屋文書のみで、九州大学所蔵の長井手永大庄屋文書、みやこ町博物館所蔵の安武手永大庄屋文書については、コロナに伴う利用制限のために閲覧することができなかった。しかしながら、友枝手永大庄屋文書については、豊前市人権センター庶民史研究会による翻刻が刊行されており、これを利用することができた。
- 3) 明治14・15年は佐賀県域は長崎県に含まれており、明治16年5月になって長崎県から分離している。
- 4) 拙稿「近代マビキ慣行研究の方法的検討—三重県と茨城県。島根県の比較分析—」(『地研年報』第17号、2012年)
- 5) 行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書
- 6) 『中村平左衛門日記』第六巻(北九州市立博物館、1988年)、385頁
- 7) 『香春町史 上巻』(香春町)、652頁
- 8) 『豊前市史 文書資料』(2003年、豊前市)、478頁
- 9) こうした書付類を添えているのは、たとえば沢山氏が分析されている岡山城下の事例では、書付が添えられているのは、77件の内の33件、津山の事例では54件の内の8件であった(沢山美果子『江戸の捨子たち』58頁)。
- 10) 拙稿「マビキと捨子の間」(『地研年報』21号、2016年)
- 11) 川本氏は、出生日時を記すのは子供の産育行事を行って貰うことを期待するからだとされているが、この点はなお検討する必要があるだろう。
- 12) 『中村平左衛門日記』第十巻(北九州市立博物館、1993年)、12頁
- 13) 『歴史と風土』第5輯(豊津町、1995年)、176頁
- 14) 上掲書337頁
- 15) 安政4年に捨子用育米制度が廃止された後、慶応元年9月に「撫育方心得書」が触達されて、撫育方・撫育所による児童保護政策が進められた(木村晴彦『幕末・維新と小倉藩農民』[海鳥社、2008年]191頁以下)。
- 16) 『中村平左衛門日記』第四巻(北九州市立博物館、1985年)13頁
- 17) 『豊前市史』上巻(豊前市、1991年)、756頁

- 18) 『歴史と風土』第7輯（豊津町、1997年）、232頁
- 19) 「安政二年国作手永御用日記」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 32）
- 20) 『歴史と風土』第8輯（豊津町、1998年）226頁
- 21) 22) 『歴史と風土』第10輯（豊津町、2002年）176頁
- 23) 捨子の乳の問題については、沢山美果子『江戸の乳と子ども』（吉川弘文館、2016年）が詳しい。



## 付表「小倉藩捨子一覧」

月日欄の406とあるのは、4月6日を示す。

### 出典欄

\*①72とあるのは、①の72頁であることを示す。

\*③390、⑬66とあるのは、主として③の390頁により、⑬の66頁を参考としたことを示す。

- ①九州文化史研究所史料集 8『小倉藩庄屋永井家文書 文化二年丑日記』（九州大学九州文化研究所史料集刊行会、2005年）
- ②『豊津町史料編 豊津藩歴史と風土』第二輯（豊津町、1991年）
- ③『豊津町史料編 豊津藩歴史と風土』第三輯（豊津町、1992年）
- ④『豊津町史料編 豊津藩歴史と風土』第四輯（豊津町、1993年）
- ⑤『豊津町史料編 豊津藩歴史と風土』第五輯（豊津町、1995年）
- ⑥『豊津町史料編 豊津藩歴史と風土』第六輯（豊津町、1996年）
- ⑦『豊津町史料編 豊津藩歴史と風土』第七輯（豊津町、1997年）
- ⑧『豊津町史料編 豊津藩歴史と風土』第八輯（豊津町、1998年）
- ⑨『豊津町史料編 豊津藩歴史と風土』第九輯（豊津町、2000年）
- ⑩『豊津町史料編 豊津藩歴史と風土』第十輯（豊津町、2002年）
- ⑪『豊前地方の近世・近代史料集 1』（豊津町歴史民俗資料館、2004年）
- ⑫福岡県文化会館編『慶応二年丙寅 豊前国仲津郡 国作手永大庄屋御用日記』（福岡県文化会館、1978年）
- ⑬『かんだ古文書調査報告書』第一集（かんだ古文書研究会、1994年）
- ⑭『かんだ古文書調査報告書』第三集（かんだ古文書研究会、1996年）
- ⑮『かんだ古文書調査報告書』第四集（苅田町教育委員会、1997年）
- ⑯『かんだ古文書調査報告書』第九集（かんだ郷土史研究会、2009年）
- ⑰『かんだ古文書調査報告書』第十四集（かんだ郷土史研究会、2014年）
- ⑱『かんだ古文書調査報告書』第十五集（かんだ郷土史研究会、2015年）
- ⑲『かんだ古文書調査報告書』第十六集（かんだ郷土史研究会、2016年）
- ⑳『かんだ古文書調査報告書』第十七集（かんだ郷土史研究会、2017年）
- ㉑『かんだ古文書調査報告書』第十八集（かんだ郷土史研究会、2018年）
- ㉒『かんだ古文書調査報告書』第十九集（かんだ郷土史研究会、2019年）
- ㉓『中村平左衛門日記』第三巻（北九州市立博物館、1984年）
- ㉔『中村平左衛門日記』第四巻（北九州市立博物館、1985年）
- ㉕『中村平左衛門日記』第五巻（北九州市立博物館、1986年）
- ㉖『中村平左衛門日記』第六巻（北九州市立博物館、1988年）
- ㉗『中村平左衛門日記』第七巻（北九州市立博物館、1990年）
- ㉘『中村平左衛門日記』第八巻（北九州市立博物館、1991年）
- ㉙『中村平左衛門日記』第九巻（北九州市立博物館、1992年）
- ㉚『中村平左衛門日記』第十巻（北九州市立博物館、1993年）
- ㉛『小森承之助日記』第四巻（北九州市立博物館、1998年）
- ㉜『小森承之助日記』第五巻（北九州市立博物館、1999年）
- ㉝『豊前国田川郡添田手永 大庄屋中村家御用日記』（添田町郷土史会・中村家御用日記編集委員会編、添田町教育委員会、1981年）
- ㉞『友枝文書史料集（四）（難民救済）』（豊前市人権センター庶民史研究会編、2013年）
- ㉟『豊前市史 文書資料』（豊前市史編集委員会編、豊前市、1993年）
- ㊱『行橋市史 史料編 近世』（行橋市史編集委員会編、行橋市、2006年）
- ㊲「弘化五年正月吉日 御用日記 国作元左衛門」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 27）
- ㊳「嘉永二年酉正月吉日 御用日記 国作庄左衛門」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 28）
- ㊴「嘉永三年正月吉日 戊御用日記 国作治郎平」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 29）
- ㊵「嘉永四年正月 亥御用日記 国作只助」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 30）
- ㊶「嘉永六年癸丑正月吉日 御用日記 国作甚左衛門」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 30）
- ㊷「嘉永七年甲寅正月吉日 御用日記 国作人左衛門」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 31）
- ㊸「安政二年乙卯正月吉日 御用日記 国作甚左衛門」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 32）
- ㊹「安政四年丁巳正月吉日 御用日記 国作磯七」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 33）
- ㊺「安政五年戊午正月吉日 御用日記 国作磯七」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 34）
- ㊻「安政七年庚申正月吉日 御用日記 国作磯七」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 35）
- ㊼「万延二年 酉御用日記 国作良平」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 36）
- ㊽「文久三年正月 亥御用日記 国作良平」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 38）
- ㊾「文久四年正月吉日 子御用日記 国作良平 国作昇右衛門」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 39）
- ㊿「文久二年正月吉日 戊御用日記 国作良平」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書 37）
- ㊽「文久二年正月 戌 捨子・帳外・盗物 御触写 国作良平」（行橋市歴史資料館所蔵国作手永大庄屋文書）

拾子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
1	文化2	1805	406	夜	田川郡	下中元寺村	法興寺	御拜	男子	6ヶ月		③72
2	文化2	1805	411	夜八つ	田川郡	柳田村	大助方	縁	男子	1ヶ月未満		③71
3	文化2	1805	816	夜	田川郡	後藤寺町	眞言	縁先	男子	3ヶ月		③167
4	文化2	1805	1220	朝	筑城郡	松江村	堺屋太蔵	表戸口	女子	10日		③207
5	文化10	1813	408	夜七つ	京都郡	上瓜田村	妙覚寺	庫裏裏縁	男子	5ヶ月		②139
6	文化10	1813	804	夜	小倉	船頭町	小屋屋敷大和 屋十兵衛	戸口	女子	15日	去七月廿一日出生と書付	②176
7	文化10	1813	826	朝夜明け	中津郡	大野井村	宝山村庄辰役 傳三郎自宅	戸口縁	女子	1ヶ月	書付類一向無御座候	②179
8	文化11	1814	926	夜	全枝郡		宗玄寺	門口	男子	7年		③13
9	文化12	1815	109	夜四つ	上毛郡	狭間村	常右衛門	門口	男子	3ヶ月		③25
10	文化12	1815	319		小倉	室町式丁目	米屋市之丞		女子	11年?	去子十二月廿五日出生と書付有之候	③62
11	文化14	1817	916		小倉	西紺屋町	小田屋源次郎	戸口	男子	2年		③79
12	文化12	1815	327	夜八つ	小倉	本町三丁目	万屋無次郎宅	戸口	女子	3ヶ月	十二月十五日と有之書付	②226
13	文化12	1815	617	夜九つ	中津郡	山鹿村	徳左衛門方	戸口	男子	2ヶ月		②252
14	文化12	1815	821	九つ	上毛郡	八屋村	茶屋喜右衛門	戸口	男子	2ヶ月	奉願一札之事 右ハ六月七日出生にて、名ハ吉太郎と申候、末々養育奉願 候、以上	②274
15	文化12	1815	901	夜	田川郡	田原村	猪熊平四郎	表口中之間 小縁	男子	15日		②280
16	文化13	1816	509	夜	全枝郡	原町村	宇佐美五平太	門内	女子	6ヶ月		②342
17	文化13	1816	515	夜八つ	田川郡	金岡村	庄屋善右エ門	表口の縁	女子	6ヶ月	権現 産子 文化十二年亥十二月廿八日、出生女子、無母	②345
18	文化15	1818	107	夜九つ	全枝郡	大里村	石原小左衛門	戸口の外の 破さるに入	男子	不明		③233
19	文化15	1818	501	夕五つ	京都郡	行事村	祐屋喜兵衛	戸口	男子	10ヶ月	書付も御座無く	③256
20	文化15	1818	621	夜	上毛郡	恒富村	清助方		女子	3年		③275
21	文化15	1818	802	夜	京都郡	入覚村	辰九郎		女子	1ヶ月	書付 此子助け可被下そうろうとあり	③284
22	文化15	1818	928	夕	上毛郡	鳥井原村	七三郎	屋敷内草履 候所	男子	5ヶ月		③294
23	文化15	1818	813	夜八つ	中津郡	今井村	浄喜寺	本堂畳敷	男子	3ヶ月	一筆申上候、しかれハくれぐれ甚難渋ニおよび、此子そた てかね候間、御寺様を見立捨候段、慈悲を以御ひろひ置な され、御育なし下され候ハハ、まし返々ありかたく奉存 候、何卒ニ御面倒なから御願申上候、以上 今月二日	③301
24	文化15	1818	1122	夜	田川郡	猪熊町	真右衛門方	店口	女子	11日	出生書付 貴布祢大明神氏子、十一月十一日	③307
25	文政2	1819	116	夜	小倉	大坂町三丁目	高妙屋宗助方	表通り格子	男子	15日		③5、③316
26	文政2	1819	329	夜	京都郡	風田村	庄屋栄蔵	表口 締帽子 を枕に捨	男子	6ヶ月		③335
27	文政2	1819	402	夜	田川郡	田原村	庄作	表口 呑に入れ捨御座候	男子	2ヶ月	文政二己卯孟春誕生、権現産子 魂緒の絶て助かる物ならハ 我日の本の神と仰かん 敬白	③337
28	文政2	1819	526	夜七つ	全枝郡	大里村	石原利左衛門	戸口の外小 きふこニ入、戸口に 立掛	男子	5ヶ月	別紙書付 一、此子去十一月十七日誕生、母相果申候、何卒御慈悲を 以御そたて可被下奉願候	③352
29	文政2	1819	626	夜七つ	京都郡	上黒田村	安勝寺	門前往来端	女子	2ヶ月		③362
30	文政2	1819	607	夜九つ	田川郡	上伊田村	百姓市右衛門	戸口	女子	6ヶ月	此子とらの師走廿五日誕生、産神は八幡宮ニ而御座候、以上 文政二年卯六月 日	③365
31	文政2	1819	706	夜	田川郡	赤田町	什右衛門	表口軒下え ふごニ入、さけ御座候	女子	7ヶ月		③370
32	文政2	1819	1028	夜	小倉	京町五丁目	久屋源吉方	戸口	男子	10日		③390、 ③66
33	文政3	1820	215	夜九つ	上毛郡	鬼木村	庄右衛門	表口外	女子	1ヶ月	一、女子壹人、当正月出生ニ而御座候処、無宿者之子ニ而 も無御座、何卒御慈悲ニ御座候間、御そたて被成下候ハ ハ、難有奉存候、御家を見立、申上御類申上候	④111
34	文政3	1820	408	夜	田川郡	下真崎村	兼平		男子	3ヶ月		⑤128
35	文政3	1820	623	夜	全枝郡		夷岸寺	裏門	女子	2ヶ月		⑤138
36	文政4	1821	118	夜	京都郡	上黒田村	妙覚寺	戸口	女子	7ヶ月		⑤186

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
37	文政4	1821	110	夜	京都郡	黒田村	安勝寺	本堂箱植	男子	1ヶ月		⑤198
38	文政4	1821	803	夜九つ	田川郡	元松村	半市	座敷口	男子	2ヶ月		⑤252
39	文政4	1821			上毛郡	大河内村	幸平方		女子	2ヶ月		⑤271
40	文政5	1822			不明				不明	不明		⑤247
41	文政6	1823	316	夜五つ	田川郡	東川崎村	甚次郎	表口	男子	5日		⑤128
42	文政6	1823	501	夜	小倉	東小姓町	延摩印右衛門	門口	女子	3ヶ月		⑤140
43	文政6	1823	903	夜九つ	中津郡	山鹿村	伴助	表口	女子	1ヶ月		⑤178
44	文政6	1823	1228	夜八つ	中津郡	田中村	弘願寺		女子	3日		⑤198
45	文政7	1824	203	夜	田川郡	東川崎村	光連寺	縁差	男子	5日		⑤210、 ⑤351
46	文政7	1824	215	夜九つ	田川郡	添田町	治郎左衛門	門口	男子	10日		⑤211
47	文政7	1824			田川郡	升田村			捨子	不明		⑤375
48	文政7				上毛郡	大西			捨子	不明		⑤377
49	文政7	1824	614	朝明六つ	田川郡	高野村	幸兵衛	門口	女子	3ヶ月		⑤257
50	文政7	1824			田川郡	高野村				不明		⑤411
51	文政7	1824	1009	夜五つ	田川郡	田原村	三右衛門	表口軒下簷 之上に捨て	男子	3ヶ月		⑤295
52	文政7	1824	1005	夜七つ	田川郡	下伊田村	庄屋孫蔵	戸口の外	女子	20日		⑤296
53	文政7	1824	1105	夜	土分	家中土	本場二助	居宅門内	男子	1年以上？		⑤302、 ⑤472
54	文政8	1825	818	夜九つ	田川郡	元松村	半市方		女子	7日		⑤20
55	文政9	1826	406		小倉	田町三丁目	住吉屋幸助方		女子	14日	戌三月廿二日出生と書付有之	⑤32
56	文政9	1826	429	夜九つ	田川郡	磯村	浄喜寺弟子法 蓮住居	戸口	女子	7ヶ月	一、乍憚一筆申上候、此子は東宗又二生、親二分、甚南儀 二及、此節奉御頼候、此子は酉九月十日生れ二而御座候、 女子一人宜敷奉御頼候、御公儀へ申進致らすとも御そでて 被成可被下候	⑤352、 ⑤32
57	文政9	1826	499		筑城郡	安武村	浄徳寺		女子	不明		⑤32
58	文政9	1826	423	夜五つ	中津郡	下本庄村	浄徳寺	庭裏中之間 玄関口	女子	5ヶ月	一、女子一人 右は去ル霜月十二日、出生二而御座候間、御慈悲ヲ以御養 育奉頼上候、以上 戌四月 本百姓 何某 元姓平孫	⑤348
59	文政9	1826	506	夜四つ	小倉	田町三丁目	住吉屋幸助	表板橋	女子	2ヶ月	戌三月廿二日出生、娘おたか	⑤350
60	文政9	1826	527	夜五つ	企救郡	金田村		上金田町下 溝流れ二小 児捨て、当 村儀助が発 見	男子	4ヶ月		⑤366
61	文政9	1825	702	夜四つ	田川郡	西夏吉村	性福寺	庫裏之縁二 簷を着て捨 てられてい た	女	2日	春日大明神之氏子也、六月晦日生、金性 抑御寺柄を見立捨置申候、御慈悲ヲ以御取上ケ被下、御助 被成下候様、偏二奉希候、次第二成人致候ハ、両親共二 重々御恩難有奉存候、偏二御頼上度奉存候、以上	⑤376
62	文政10	1827	120	夜五つ	中津郡	大橋町	伴右衛門	戸口脇	女子	15日		⑤115
63	文政10	1827	711	夜九つ	中津郡	山鹿村	伴助	表口	男子	20日		⑤161
64	文政10	1827	806	夜九つ	筑城郡	松江村	浄國時	縁先	女子	2ヶ月	閏六月二日生、氏神八幡宮高田氏、宜敷御頼申上候と申、 書付添	⑤169
65	文政10	1827	816	夜四つ	田川郡	上糸田村	庄屋久四郎休 宅	門口	女子	2ヶ月		⑤172、 ⑤29
66	文政10	1827	1014	夜九つ	企救郡	大里村	辻本茂左衛門	表口	女子	1ヶ月	先月十三日之出生と書付添居申候	⑤182
67	文政10	1827	1206	夜八つ	中津郡	大橋町	与八	戸口	男子	15日		⑤190、 ⑤43
68	文政11	1828	112	暮六つ	小倉	大門町	紙屋惣兵衛	居宅戸口	男子	2ヶ月	去十一月四日出生と有之	⑤199
69	文政11	1828	821	夜九つ	田川郡	添田町	辻右衛門	表口	男子	11ヶ月	口上申上候 一筆御頼申上候、此子母二後レ候へハ、命続き兼、ともに 難儀仕候間、何とそ御慈悲ニ御取揚可被下候様、御頼申上 候、以上 八幡宮氏子 亥九月廿七日出生	⑤260、 ⑤15

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
70	文政11	1828	919	夜五つ	不明		森貞右衛門役宅	戸口	男子	7ヶ月	子二月二日生、じひ奉願上候と書付御座候	⑥267
71	文政11	1828	1212	暮六つ	小倉	大門町	紙屋宗兵衛	居宅戸口	男子	1ヶ月	去十一月四日出生と有之	⑦3
72	文政12	1829			狭城郡	水原村	長寿寺		捨子	不明		⑦195
73	文政12	1829			中津郡	今井村	淨喜寺		捨子	不明		⑦206
74	文政13	1830	110	夜五つ	中津郡	下伊良原村	治右衛門	戸口の外	女子	3ヶ月	外書付類無御座候	⑥292
75	文政13	1830	406	夜八つ	中津郡	筋九村	酒屋新助	表口竹縁	女子	2ヶ月	口上 醒而申上候、此小児儀、去ル閏月二日、誕生仕候所、不如意二付、養育難仕仕合御座候、何卒非常之御慈悲を以、一命御助被成下候は、生々世々御厚恩之段忘却仕間敷奉存候、已上	⑥320
76	文政13	1830	409	夜四つ	築城郡	上別府村	宝蓮寺	御堂前	女子	3ヶ月		⑥321
77	文政13	1830	1219	夜	不明		松井栄右衛門 居宅	門内	女子	11ヶ月		⑥324
78	文政13	1830	1229	夜五つ	田川郡	下香春村	彦右衛門	表口縁	女子	3ヶ月		⑦147
79	天保2	1831	108	夜八つ	田川郡	上野村	市平女房	村下の口口 之前に捨御	男子	3ヶ月		⑦148
80	天保2	1831	125	暮六	京都郡	行司村	角屋六右衛門	表口	女子	1ヶ月	文政十三庚寅歳十一月十五日申ノ刻誕生と書付御座候 外二怪我除御守一對、両様守袋二入居申候	⑦155
81	天保2	1831	905	夜	田川郡	夏吉村	因隆寺	門内	女子	8ヶ月		⑦232、 ⑦119
82	天保2	1831			田川郡	升田村			捨子	不明		⑦119
83	天保3	1832	302	夜	田川郡	上伊田村	道場錦照隠居所	表口	女子	3ヶ月		⑦280
84	天保3	1832	509	夜八つ	田川郡		金田四郎兵衛	表口	男子	6ヶ月	乍泪書印 一、卯霜月十五日産生 一、天降八所宮氏子	⑦293
85	天保3	1832	519	夜四つ 半	田川郡		彌古右衛門	表口 子供之 古羽織二包 古そふけ二 入捨	女子	3日		⑦300
86	天保3	1832	527	夜	小倉	京町二丁目	出雲屋与兵衛	戸口	女子	1ヶ月		⑦304
87	天保3	1832	920	夜五つ	中津郡	大崎町	庄屋勘七	表宜 浅黄ね わほふし二 包御座候	男子	2ヶ月		⑦348
88	天保3	1832	1008	夜四つ	企救郡		今村九兵衛	表口	女子	2ヶ月	提礼 天保三辰八月十五日生	⑦358
89	天保3	1832	1027	夜九つ	田川郡	上糸田村	又十郎	裏口	男子	7ヶ月		⑦365
90	天保3	1832	1026	夜九つ	田川郡	池尻村	庄屋佐々木六 太郎	裏口	女子	1年	大行事殿氏子辛卯十月四日出生、二才女子と書付相添	⑦366
91	天保4	1833	403	夜四つ 半	田川郡	秋永村	藤十	表口縁先	男子	5ヶ月		⑧156
92	天保4	1833	422	夜四つ	筑城郡	下本庄村	淨徳寺	寺中	女子	7日	八幡宮産子、四月十五日出生、長野某之娘也	⑧161
93	天保4	1833	424	夜四つ	田川郡	安宅村	九八	表軒下	男子	1年	辰四月出生、八幡宮産子と書付御座候	⑧184
94	天保4	1833	711	夜前九 つ	企救郡	木下村	半右衛門	裏口	男子	10ヶ月		⑧194
95	天保4	1833	722	夜九つ	田川郡	上弓削田村	源左衛門	表口	男子	3ヶ月		⑧196
96	天保4	1833	807	未明	中津郡	木井馬場村	即佐寺	本堂前縁側	女	5ヶ月	当二月廿八日出生と書付相添居申候	⑧201
97	天保4	1833	915	未明	京都郡	大村	靖龍寺	本堂前	男子	5日	八月廿日出生と書付御座候	⑧211
98	天保4	1833	1111	夜四つ	田川郡	田原村	才助	表口	男子	13ヶ月	奉願上小人之事 一、八幡宮之産子ニ而御座候間、此子辰之十月生、同十二月、母間では申候所、甚なんき仕候、御次日以そ立被仰付可被下候、奉願上候、以上 巳十月吉日以上 田原村御周様	⑧222
99	天保5	1834			士分		宮崎登兵衛殿 捨子		不明	不明		⑧96
100	天保6	1835	210	夜七つ	田川郡	浜田町	清右衛門	座敷口	男子	1ヶ月	但、大菩薩氏子未正月中旬生、母親失ひ候いやしからざる百姓倅、此小児捨揚可被下候、母書付添	⑧270
101	天保6	1835	328	夜五つ	田川郡	下赤村	庄屋通藏	表縁口	女子	10日	一、此度奉願上候氏神も御座候得共、印難御座候、以上 三月十八日生	⑧297

拾子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
102	天保6	1835	411	夜八つ	田川郡	西川崎村	利助	表口	女子	1ヶ月	一、戸山椿現之氏子ニ無間違御座候程ニ御取掲、御そ立被成可被下候。宜敷奉願上申候、以上 天保六年未三月 午年女 みさよ	③300
103	天保6	1835	499		不明				男子	10日	四月十六日生 氏神脇方へ無御座候、御神様有難申上候	③301
104	天保6	1835	411	夜九つ	中津郡	元永村	孫九郎	表口	男子	5ヶ月	覚 但、此者儀、誕生午十一月七日出生ニ而致捨子候之間、御拾上、養生御願上申候、已上 天保六年未四月日	③302
105	天保6	1835	424	夜九つ	企救郡	北方村	半兵衛	納戸口	女子	16日	但、出生当月八日と書付添居申候	③305
106	天保6	1835	519	未明	中津郡	矢富村	真行寺	裏戸口 ざるに入、捨	女子	3ヶ月		③316
107	天保6	1835	605	夜四つ 過	京都郡	南原村	庄次郎	表口	女子	5ヶ月		③321
108	天保6	1835	614	夜九つ	中津郡	木山村	生立社熊谷常 陸介方	表口	女子	不明	覚 一、女子老入 但、若宮八幡宮氏子女子老入産之、庭で母死去仕候、男老入ては甚難渋仕候間、捨子仕候、為御慈悲之御拾揚可被下候、為其一札如件	③323
109	天保6	1835	625	夜七つ	田川郡	安永村	医師長主民治	表口	女子	6年?	一紙申上候、老入捨子御拾揚、是非々々御養育可被下候、石田氏のはて成、おやなし、丑正月生、六月廿五日、御兩人のおやかた様御たのみ申上候 御ふくさま	③326
110	天保6	1835	726	夜四つ	中津郡		長井寛七役宅	表口	女子	5ヶ月	但、未二月八日さかしゆなり、ははがひよきと書付添	③340
111	天保6	1835	U702	夜九つ	田川郡	安宅村	吉助	表口 ざるに入、捨	女子	7ヶ月		③345
112	天保6	1835	810	曉	上毛郡	八屋村	医師文龍跡後 家方	屋敷外小路 土地ニ墮 せ、古風呂 敷を覆い、 捨有之	男子	1ヶ月		③361
113	天保6	1835	911	夜四つ 半	田川郡	添田町	医師見龍方	表口	女子	1ヶ月	但、未八月、生八幡宮氏子ニ相違無御座候と書付添御座候	③368
114	天保7	1835	315	夜	上毛郡	山内村	衆右衛門	戸口 布団 に巻、捨	女子	3ヶ月		③153
115	天保7	1835	518	夜	京都郡	流束村	幸作		女子	3ヶ月		③169
116	天保7	1835	618	夜	筑前郡	上り松村	平助	戸口 小布 団に巻捨	女子	2年		③187
117	天保7	1835	710	夜	田川郡	下今任村	武右衛門方		女子	4ヶ月	八幡宮氏子、三月十五日誕生と書付添	③203
118	天保7	1835	829	夜八つ	上毛郡	八屋村		四つ辻と申 所	男子	2年		③208
119	天保7	1835	827	夜四つ 過	中津郡	稲置村	七右衛門	戸口 小布 団に巻捨	女子	7ヶ月		③218
120	天保7	1835	1002	夜七つ	田川郡	田原村	六右衛門	表戸口	男子	10ヶ月	覚 一、男子老入 此子未十二月十五日ニ出生いたし候所、みなし子ニなり候間、御慈悲に命御たすけ被下候様ニ御願申上候、月日 右之通書付添	③234
121	天保7	1835	1113	夜五つ	企救郡	三(郎)丸	高橋一角	本玄関敷台	男子	1ヶ月	十月十日出生と紙札ニ相記有之候	③245
122	天保7	1835	1125	明け六 つ	中津郡	天生田村	紋五郎	村上往来端 小児さる二 入、捨	男子	18日	但書付二 此子誕生日当十一月七日之出生、養育致得不得申候間、何卒御慈悲を以御養育奉願上候 申十一月廿四日 何某	③247

拾子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
123	天保7	1836	1125	夜四つ	中津郡	真鶴村	清右衛門	戸口 小布団に 巻、捨	女子	21日	但、書付二熊と姓名相印不申候、偏二御恵ミ奉希上候、右 は当月四日出生之女子、無廻次第二而養育難相叶候二付、 神仏之御恵を以助命程、此処二而奉相待者也 天保七申十一月	⑨247
124	天保7	1836	1214	夜半時 分	小倉	米屋町二丁目	中津屋魯六		男子	2ヶ月	十月廿八日出生と書付	⑨259
125	天保7	1836	1215	夜八つ	上毛郡	上荒堀村		村中え捨 置、近所の 溝え退入込 居候を方頭 仲四郎が拾 上げ	女子	10ヶ月	書付類も無御座候	⑨271
126	天保8	1837	130	夜四つ 迄	上毛郡	八屋村	喜右衛門方	戸口	女子	2年		⑨274
127	天保8	1837	219	夜九つ	中津郡	天生田村	栄次郎	戸口	女子	7ヶ月	去申七月七日と書付、小キ鑑一面添御座候	⑨287
128	天保8	1837	227	夜八つ	中津郡	天生田村	藤右衛門	戸口	男子	2ヶ月	但申十二月十四日出生と書付御座候	⑨293
129	天保8	1837	308	夜九つ	中津郡	真鶴村	兵助	表口	男子	2ヶ月	但、此子奄人申上候、然は女をや無御座候間、御願申上 候、御家から見上申上候、此子たん上当正月二日の夜二う まれ申候間、偏に御願申上候と書付添	⑨301
130	天保8	1837	308	夕七つ	企救郡	守恒村	庄七	往來片野村 脇へ右女子 泣居、庄七 婦りがけ見 付ける	女子	6年		⑨305
131	天保8	1837	309	夜九つ	京都郡	上片嶋村	八右衛門	表口	男子	3ヶ月	口上 御申上候は去年十二月出生之男子去冬母をうしない、男子 之手二而そだてきり不申候二付、何分此子之幾末御願申上 候、乍併ほいとうの子でもなし、ゑたの子でもなし、何卒 幾末を御願申上候、但、ちゝ之義は麦飯の上湯に而も、本 飯の上湯に而も中位のなら茶二而一はい二餅あめの切二つ 御入被成候ハ、よくまで、とけ候へはめる湯になし、御 のませ被下候、しかし、あまりうすく御座候へはおなかを くだし候故、御見合可被下候、御家を見上、御願申上候 間、何卒ひろい湯、御そだて可被下候、返す返すも宜様御 願申上、如此御座候、已上 三月九日	⑨306
132	天保8	1837	225	夜五つ	田川郡	添田町	儀兵衛	門口	男子	3ヶ月		⑨308
133	天保8	1837	309	夜五つ	田川郡	下赤村	久六	戸口	女子	3年	一、女子天満宮氏子相違無御座候、歳三才ニ相成候、二親 共ニ御座候へ共、てて親風しつ二而難儀仕候二付、御家を 見立、捨申し候間、何卒御助被成可被下候、已上 酉三月	⑨315
134	天保8	1837	309	夜	筑城郡	下湊村	健次郎	表口	男子	3ヶ月		⑨321
135	天保8	1837	316	夜暮れ 六つ	京都郡	行司村	万右衛門	戸口 魚棚之上二 小兒捨	女子	2ヶ月		⑨322
136	天保8	1837	329	夜八つ	田川郡	下弓削田村	鍛冶勘三郎	戸口	男子	3ヶ月		⑨329
137	天保8	1837	402	夜五つ	筑城郡	賀儀九村	庄屋三治	門先	女子	9ヶ月		⑨333
138	天保8	1837	405	夜鶏鳴 頃	田川郡	香音町	普龍寺	戸口側	男子	18日	書付左之通相添 但、三月廿七日晚四つ時分生れ、八幡宮内子民けいつ御座 候へ共、ともと有之	⑨339
139	天保8	1837	408	夜	中津郡	道場寺村	庄屋良平方	表口	女子	1ヶ月	覚 一、女子奄人 右は此子二月廿七日出生御座候、女親無之 候故、養育出来不申候二付、御家見立申し候間、何卒以御 慈悲養育御願申上候、決而粗末之者二而ハ無御座候間、行 末宜敷願上奉願候、已上 月日 何かし	⑨341
140	天保8	1837	408	夜明方	田川郡	下採鍋所村	儀右衛門	門先	女子	4ヶ月	書付左之通相添 此子身柄之義、宜奉願上候、誕生日申十二月一日、母無し 子之事ならバ印無し、偏宜奉願上候、氏神八幡宮	⑨341
141	天保8	1837	417	夜	小倉	京町六丁目	米屋弥平方	戸口	男子	不明		⑨351

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
142	天保8	1837	414	夜半時 分	上毛郡	山内村	桑右衛門	前戸口	女子	11ヶ月	申五月生と書付有之	㊥353
143	天保8	1837	417	夜四ツ 過	上毛郡	山内村	忠平	前戸口	女子	5ヶ月		㊥353
144	天保8	1837	423	夜	小倉	簗町	川崎辰助方	表戸口先	女子	10日		㊥356
145	天保8	1837	425	夜	上毛郡	塔田村	孫右衛門方	戸口	男子	3ヶ月		㊥357
146	天保8	1837	422	夜鶏鳴 時	京都郡	鋤崎村	忠市	表口	男子	3ヶ月		㊥358
147	天保8	1837	423	夜	上毛郡	下河底村	俊治	表口	男子	6ヶ月	未十月二日生置 右ハ極難ニ而渡世出来兼候間、無覺捨子ニ仕候、誠ニ是迄 手ニ付、名残敷候得共、世の有様是非もなき次第奉存候、 随分此後此子御養ひ被下候ハ、生々世々御恩ハわすれ申 間敷候、宜御願申上候 月日 某	㊥367
148	天保8	1837	502	夜五ツ	田川郡	上落合村	仕八	戸口	女子	3ヶ月		㊥370
149	天保8	1837	604	夜九ツ	京都郡	下梅田村	大分社	馬場先 小児巻人明 依ニ入捨	男子	1ヶ月	但、酉五月朔日出生、八百宮氏子御願申上候	㊥393
150	天保8	1837	611	夜	田川郡	安永村	医師丹治方	表口	女子	1ヶ月	左之通書付相添 一、奉願上候、此子両親相果申候間、我々はこくみ申かね 候ニ付、御情を以御助被下候よふニ奉願上候、御情之義、 忘不申候、宜奉願上候、已上 明神宮産子、行歳三才	㊥395
151	天保8	1837	617	今朝	茨城郡	高塚村		村隣往来へ 女子捨 村方甚蔵田 園へ参り掛 け見申候	女子	1ヶ月	書付所持左之通ニ御座候 此子八幡宮之氏子、父小田何某、藤原姓、母同姓、官名付 有之候ニ付、其密子若同姓相知レ候テハ先祖代々相統之知 行令亡滅、猶不忠・不義之次第第二も押移、恐 君慮、無余 儀厄并相願者也 五月十七日誕生 名 阿土 貳十貳才 父 十七才 母	㊥396
152	天保8	1837	626	夜	企救郡	高根村	源次郎方		捨子	不明		㊥176
153	天保8	1837	718	夜九ツ	田川郡	添田町	勘次郎	門口	女子	5ヶ月	但、二月十日生と書付相添	㊥146
154	天保8	1837	722	夜四ツ	中津郡	天生田村	由助	戸口	男子	2年		㊥147
155	天保8	1837	727	夜七ツ	小倉	京町五丁目	久辰利七方	表戸口	男子	2年		㊥152
156	天保8	1837	728	夜	田川郡	新所(城)村	半三郎	戸口	男子	5年		㊥158
157	天保8	1837	728	夜九ツ	上毛郡	八屋村	佐平	戸口	男子	2年		㊥158
158	天保8	1837	724	夜九ツ	田川郡	猪熊村	平市	表口	女子	1年	申七月廿七日産と書付相添居申候	㊥159
159	天保8	1837	810	夜九ツ	田川郡	伊方村	庄屋田中寛兵 衛	門口	男子	1ヶ月	但、八幡宮生子、七月十一日生、右之通御願上奉候、以 上と書付相添居申候	㊥166
160	天保8	1837	817	夜四ツ 過	中津郡	大橋町	清助	表口	男子	5ヶ月	当三月十九日出生と書付添申候	㊥168
161	天保8	1837	816	朝	上毛郡	烏井畑村	観音堂	女子	女子	2ヶ月		㊥168
162	天保8	1837	807	夜九ツ	企救郡	霞根開作所	兵次郎	戸口先	女子	1年8ヶ月	但、産神正八幡大菩薩天保七年申正月廿二日生と書付相添	㊥169
163	天保8	1837	799	夜五ツ	京都郡	与原村	庄右衛門	裏口	女子	1年4ヶ月	但、右之通書付添 御願申上候、女子此度一人御すくい被成可被下候、申三月 廿九日夜四ツ時生、此日みすのへ子ノ日	㊥170
164	天保8	1837	816	夜	田川郡	下宮崎村	庄屋謙平	表口	男子	1ヶ月	申七月朔日生、貴船宮氏子と書付相添居申候	㊥171
165	天保8	1837	826	夜四ツ 半	中津郡	大橋村	弥右衛門	表戸口	男子	3ヶ月	当五月七日出生と書付添申候	㊥174
166	天保8	1837	816	夜四ツ	京都郡	長音寺村	源四郎方	表口	女子	8ヶ月	申十二月十九日出生と書付添御座候	㊥175
167	天保8	1837	821	夜九ツ	田川郡	上中元寺村	新九郎	表口	女子	10ヶ月	八幡宮氏子ニ無相違候、天保七年申十月十四日出生、女子 巻人、何卒卒御世話御たすけ可被下候様ニ宜敷御願申上 候、以上 酉八月吉日 と書付添御座候	㊥180

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
168	天保8	1837	905	夜八つ	筑城郡	築城上村	金剛寺	本堂外縁	男子	5ヶ月	上願口上一礼之事 一、男子奄人当四月八日ニ出生いたし候、猶又まきらわし き物ニ而は無御座候故ニ御そたて可被下候様、此段奉土願 候、口上書如件 八月 日	⑧191
169	天保8	1837	923	夜	田川郡	東川崎村	光蓮寺	庫裏裏表口	男子	不明	幼名を植田恵喜蔵、右男子御發育可被下候ハ、生々世々 難有奉存候	⑧198
170	天保8	1837	1010	夜九つ	京都郡	上津熊村	庄蔵	戸口	男子	3年		⑧199
171	天保8	1837	1013	晩	上毛郡	八屋村	弥七	門先	女子	11ヶ月	天保七年霜月十六日出生、性宜者ニ御座候へ共、故有之、 發育難仕候間、御養可被下候、誠ニ去年以来之諸色高値ニ 而養兼候間、御願申上候、已上	⑧203
172	天保8	1837	1223	夜九つ	田川郡	中伊田村	孫右衛門	表口	女子	3年		⑧222
173	天保9	1838			土分		小野久兵衛殿 方		捨子	不明		⑧585
174	天保10	1839			中津郡	今井村	善徳寺	庫裏表口	女子	1年1ヶ月	酉十二月朔日 一、出生名 はん 右之通母親長々病氣ニ而相果、誠ニ難洪ニ有之候間、御家 御人柄を見立、右女子御そたて可被下候様御願申上候、誠 ニ由緒有之者ニ御座候得共、右之仕合ニ付、奄人御助と思 召御そたて可被下候ハ、成長之上対面可仕候、此段偏御 願申上候、已上 天保十年亥二月 某	52-45
175	天保10	1839			不明				捨子	不明		⑧44
176	天保10	1839			小倉		大坂屋良助方		捨子	不明		⑧91
177	天保10	1839			小倉		岩田屋仁三郎		捨子	不明		⑧214
178	天保11	1840			不明				捨子	不明		⑧263
179	天保11	1840			小倉		素輪屋助左衛 門		捨子	不明		⑧271
180	天保11	1840			飽郡					不明		⑧275
181	天保11	1840			小倉	京町	石壁八十郎		捨子	不明		⑧387
182	天保11	1840			筑城郡	椎田村	西福寺		捨子	不明		⑧387
183	天保11	1840	1225	夜四つ	田川郡	赤池村	加治元兵衛	戸口先	男子	5ヶ月	権現産子 男子奄人 当七月二十八日産 發育難相成故、 御慈悲奉願候、已上 天保十一年極月 日	⑩10
184	天保12	1841	404	夜四つ 半	中津郡	草場村	岩吉	戸口 古きしま風 呂敷をしき 捨御座候	女子	4ヶ月	白山権現氏子、誕生子之十二月廿一日と書付添居申候	⑩97
185	天保12	1841	406	夜四つ 半	筑城郡	東八田村	法然寺	本堂と庫裏 裏之間廊下 之外	男児	3ヶ月		⑩103
186	天保12	1841	420	夜四つ 過	中津郡	本庄村	庄三郎	戸口	男子	5ヶ月以 上	御願申上候一書入 捨子之親兩人 今月今夕 奉一筆ヲ以御願申上候 一、此小児去年出生之男子ニ御座候処、極々難洪之両親ニ 而今日發育方出来不仕候ニ付、御仁心ヲ見立捨申候、何卒 御慈悲ニ此子御助ケ被遊可被下候様奉願上候、親ならずの 私共、誠ニ預心御恩之程生々世々難忘奉願候、人姓之此子 一命御救可被下候、神仏ニ掛ケ而奉願上候、以上 天保十二年辛丑卯月日 極々難洪之両親 御慈悲之御方様	⑩114
187	天保12	1841	421		田川郡	上伊田村	藤次郎		男子	20日		⑩125
188	天保12	1841	423	夜	田川郡	小内田村	次右衛門		男子	4年	一札相添、亀山産当年四成	⑩125
189	天保12	1841	620	晩七つ 半	小倉	魚町銭丁目	大黒屋儀兵衛	戸口	女子	12日	当月八日出生と書付有之	⑩166
190	天保12	1841	613	夜八つ	中津郡	行司村	梶ノ市と申官 人	表口	女子	3ヶ月		⑩167
191	天保12	1841	630	夜	田川郡	香春町	淨妙寺	本堂様下	男子	15日	八幡宮産子、当月十七日出生産子奄人、御ひろい上ケ御そ たて被成被下候様、宜御願申上候、母親無御座候、難洪仕 候、宜御願申上候 丑六月	⑩182



捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
192	天保12		715	夜	上毛郡	八屋村	治助		女子	6ヶ月	一、女子乞人 天保十二丑閏正月生ニ御座候、此娘一生不通捨子ニ仕候 二付、御家柄を見立相頼申上候、行々宜御自愛之程偏ニ奉 希候、性立花氏ニ而御座候、右之段御拾ひ上可被下候、已 上 天保十二丑七月吉祥日	㊦206
193	天保12	1841	725		田川郡	今任村		猪追山道端	男子	不明		㊦214
194	天保12	1841	803	夜	田川郡	下津野村	長次郎		男子	不明		㊦226
195	天保12	1841	806	夜	田川郡	坂川崎村	光彦寺	表口	男子	不明		㊦226
196	天保12	1841	902	夜	田川郡	下津野村	仁左衛門		男子	4年		㊦252
197	天保12	1841	1010	夜	田川郡	添田町	助次郎抱持明 辰		女子	20日		㊦277
198	天保12	1841	1023	夜	京都郡	錦原町	熊吉	表口	男子	1年		㊦278
199	天保12	1841	1106	夜四つ 半	中津郡	大橋村	庄次郎	表戸口	女子	6月	当月出生と書付添申候	㊦293
200	天保12	1841	1116	夜	田川郡		猪膝平四郎	門内	女子	2ヶ月	九月十七日と書付添申候	㊦307
201	天保13	1842	599		田川郡	東川崎村	光通寺		不明	不明		㊦22、㊦ 392
202	天保13	1842	803	夜八つ	上毛郡	八屋村	医師文龍後家 方	裏戸口	女子	1ヶ月	此小児義、素性も宜者の種々御座候得は、全母親産後死去 仕、男の手にて者養育難成奉存候間、御人柄を見立申候ニ 付、何卒養育奉願候、誕生の日は七月八日出生仕候、未産 名も付不申候間、是又宜御計可被成候、以上 七月廿二日	㊦401、 ㊦22
203	天保14	1843	823	夜	小倉	京町四丁目	孫屋平兵衛方		不明	不明		㊦420、 ㊦23
204	天保15	1844	514		京都郡	新津村	明増寺	寺内	不明	不明		㊦447、 ㊦23、㊦ 633
205	天保15	1844			他郡				捨子	不明		㊦635
206	天保15	1844	706		小倉	室町三丁目	油屋長次郎方		不明	不明		㊦456、 ㊦23、㊦ 672
207	天保15	1844	914		田川郡		金田手永大庄 屋金田四郎兵 衛方	門口	女子	17ヶ月	天保十四卯年四月十七日、女者相果候なり、栗原氏おの ふ、四月十七日うまれ、劔大明神、この子た可申候 天保十五辰年	52-46
208	弘化1	1844	1230	夜	小倉	魚町四丁目	米屋徳助方		男子	15日	去る、十二月十五日誕生と書付有之	㊦23
209	弘化2	1845	1114	夜	小倉	出町四丁目	伊勢屋茂七方		不明	不明		㊦24
210	弘化3	1846	326	夜	中津郡	上高屋村	念徳寺		不明	不明		㊦24
211	弘化3	1846	514	四つ時	上毛郡	八屋村	西往来半川橋 下		男子	3ヶ月		㊦24
212	弘化3	1846	505	夜九つ	田川郡	油須原町	吉五郎方	表口	男子	5ヶ月	捨往来 一、男子乞人 年式歳 但し、去年十二月十日出生 御慈悲を以てひらい立て、御助け下さるべく候 氏神八幡宮 弘化三年午四月	㊦25
213	弘化3	1846	519	夜	企救郡	下曾根村	彦太郎方	表口	男子	2ヶ月	一 此の子すておく、ひらい上げ下さるべく候、三月廿二 日生まれ、新太郎、宜しく御たのみ存じ候 うじすじょう	㊦25
214	弘化3	1846	1120	夜五つ	上毛郡	八屋瀬	藤兵衛方	戸口	男子	3ヶ月		㊦26
215	弘化5	1848	103	夜五つ	中津郡	道場寺村	文五郎	表口	男子	1年	御家がらを見立て、此の子御願ひ申し上げ候 未正月三日出生	㊦27
216	弘化5	1848	103	夜五つ	上毛郡	願成寺村	久五郎	表口	男子	8ヶ月	但御家からを見立此子御願申上候、五月三日出生ニ而書付 添居申候	㊦
217	弘化5	1848	106	夜四つ	田川郡	添田町	徳助方	裏口坂の上 門先町中へ	男子	7ヶ月	添書	㊦27
218	弘化5	1848	299	今晩七 つ	田川郡	香春町	年寄古藤屋利 左衛門	右之男子退 居候間	男子	1年11ヶ月	午五月廿一日生 八幡宮氏子 頭毛添	㊦、㊦28

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
219	弘化5	1848	322	鶏鳴時 分	中津郡	大槻村	喜八	裏口	女子	6ヶ月	左之通添書御座候 覚 一、此者去ル未九月十五日出生仕候所、母産後病氣等仕 候、相果申候付、是迄もらいちゝ仕候間、養内々仕候得 共、何角不如意二付、そたて得不申候、乍恐御当家御家柄 を見立相捨申候間、御慈悲以御養内々偏ニ奉希上候、名者 おすみと名付申置候間、万端宜御願申上度添書如此座候、 以上 産神明神宮	⑩、⑫28
220	弘化5	1848	328	夜	小倉	大坂町巻丁目	高砂屋六兵衛	戸口	男子	6ヶ月	未九月廿九日出生の書付相添え	⑫29、⑩
221	弘化5	1848	515	夜	上毛郡	下川内村	房蔵方	戸口	男子	1年3ヶ月	但未二月廿九日出生と書付御座候	⑩、⑫29
222	弘化5	1848	720	夜九つ	田川郡	後藤寺町	二村武兵衛方	表口 ふご に入れ壁に 掛け捨て	男子	1ヶ月	外ニ書付等も相見へ不申候	⑩、⑫30
223	弘化5	1848	825	夜九つ	田川郡	伊加利村	下伊任村庄屋 雄五郎休宅	表口	男子	2ヶ月	大明神産子、申六月十七日生まれ 一、此子母親はなれ甚難育、何卒御慈悲ヲ以御養育可被申 候、以上	⑩、⑫30
224	弘化5	1848	729	夜九つ	京都郡	中津藩村	半蔵方	表口	女子	6ヶ月	左之趣書付添御守添書 一、産砂山王社 当年二月十二日生 右ニ付、随分出生正敷候得共、父親短命故、何卒偏ニ御養 生被下度、生々世々之大恩不可■申候、仍添書如件 月日 何某母	⑩、⑫30
225	弘化5	1848	824	夜五つ	筑前郡	松丸村	次郎右衛門	表口	男子	6ヶ月	覚 一、出生之男子、正月きのえうし八日二たん生、氏神者大 明神、何の何かし ゞ 右者、をつと二はなれ、かんなんくるしみニ至り候て、な にとそ御しひに御取たて可被申候、以上 月日 なを又、此子ニせつ生中どうりのわろき事をいいきさせ下 さるべく候、一とえに御願申候 すてらるる子のこころより すつる又おやはあけしもちのなみたかな	⑩、⑫31
226	弘化5	1848	825	朝六つ	田川郡	添田村	法光寺		男子	2ヶ月	当六月十一日出生之書付添	⑩、⑫32
227	弘化5	1848	904	夜五つ 半	田川郡	下香春村	庄屋井沢重右 衛門役宅	表口	男子	3ヶ月	覚 一、男子壱人 但し、生い立ち申四月十五日 右は、大家と相見立て申し候に付、此の子壱人捨て置き申 し候、何卒御ひろい上げ、御そだて遊ばされ下さるべき 様、重々宜しく御頼み申し上げ度、此の如くに御座候 寅九月四日 尚々、女親出産後より気分相勝れ申さず候に付、ちちとて も無御座く候間、何分宜しくご勘弁下さるべく偏に頼み奉 り候、以上 上書 下香春村御庄屋様	⑫32
228	弘化5	1848	929	夜五つ	中津郡	真淵村	喜左衛門方	表口	男子	1年5ヶ月	但未去四月十五日出生名熊太郎と書付添居申候	⑩、⑫33
229	弘化5	1848	1002	夜九つ	田川郡		金田四郎兵衛	表口	女子	6ヶ月	左之通書付相添 四月八出生	⑩、⑫33
230	弘化5	1848	1028	夜	中津郡	今井村	恩高寺	本堂裏 勝五郎が金 屋村から引 取途中で発 見	女子	11ヶ月	但霜月廿七日出生と書付添居申候	⑩、⑫34

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	崔付	出典
231	弘化5	1848	1118	夜五つ 半	中津郡	今井村	庄吉方	表口	男子	1ヶ月	但妙見宮産子当月二十五日誕生紛敷出生ニ無御座候、尤抱 瘡未不仕候ト崔付相添居申候	㊤、㊤34
232	弘化5	1848	1211	夜八つ	中津郡	元永村	伴作	表口	女子	1年4ヶ月	八幡宮氏子、未七月廿六日産生 右女子を人、両親共御座無く候て、甚だ以てそだて兼ね候 間、貴所様方御門をたより捨て置き候、何卒ひろい上げ御 そだて下さるべく候様に偏に御頼み申し上げ候、殊の外ひ ん家暮らしに候えども、一向別条の何方子には御座無く候 間、何卒宜しく御頼み申し上げ候、右申し上げ度此の如く に御座候、以上 月日	㊤35
233	嘉永2	1849	116	夜	田川郡	伊加利村	又右衛門	門口	女子	1年7ヶ月	一、八幡宮産子未六月十二日生	㊤
234	嘉永2	1849	318	夜鶏鳴 時	中津郡	大橋村	柏木勘八郎方	表口	女子	1ヶ月	添書之事 一、此女子之養者、当酉二月上旬出生仕り候に付、私共何 敷立行之養六ヶ敷御座候間、其元様へ御約界罷成候之間、 此上なから宜奉願候、以上 酉三月	㊤、㊤36
235	嘉永3	1849	318	夜鶏鳴 時	中津郡	大橋村	柏木勘八郎方	表口	女子	2ヶ月	添書之事 一、此女子之養者、当酉二月上旬出生仕り候に付、私共何 敷立行之養六ヶ敷御座候間、其元様へ御約界罷成候之間、 此上なから宜奉願候、以上 酉三月	㊤、㊤37
236	嘉永2	1849	407	夜	企救郡	西朽網村	市蔵方		男子	20日	八万うじこ ニりうちそと 百升のこ そたてたもれ たのみます	㊤、㊤ 37、㊤66
237	嘉永2	1849	407	夜四つ	中津郡	徳政村	庵地	縁先	女子	2ヶ月	覚月日証 憚りながら御頼申上候、然者難儀者兩人御座候処、当二月 五日此子産落シ、露に母親死去致し候後、男親はごくみ 兼、右同人此子捨置欠ヲ知致、行方相不分、極々不仕合乃 者に付、何卒御じひに御ひろい上可被下候様偏に奉希候 嘉永二酉卯月吉日	㊤、㊤37
238	嘉永2	1849	U409	今朝夜 明け前	中津郡	上板村	古右衛門方	稲屋軒下	女子	20日		㊤、㊤38
239	嘉永2	1849	U415	夜八つ 時	京都郡	前田村	末松七左衛門 自宅	表口	女子	2ヶ月	口上御願申上候 一、当三月五日出生女子、母者産之場ニ而死去仕、私も殊 之外難渋之身柄ニ付養育被逃可被下候、尤氏神は八幡宮ニ 而御座候、宜奉願上候、以上 閏四月十三日	㊤、㊤38
240	嘉永2	1849	U427	今晚七 つ	企救郡	長浜浦	円心寺末庵端 隣室	戸口	女子	2ヶ月	嘉永二年酉三月三日 酉年女 女親無御座候二付、ちち親一人そだてがたし	㊤39、 ㊤、 ㊤101
241	嘉永2	1849	511	夜鶏鳴 時	中津郡	上原村	弥作	表口 器に 入れ捨て	女子	7ヶ月	一、此子当年母親に別れ及難渋、道ならず事乍存、無拠此 所に捨置候間、何卒御慈悲を以御そだて被下候得者、海山 とも御高恩之義かけなからわすれ不申候、以上 ごんげんうじ子 申十月廿一日出生、産名のふ 酉五月吉日	㊤、㊤40
242	嘉永2	1849	606	今晚	中津郡	崎山村	平作	表縁口 ふ ごに入れ掛 け御座候	女子	1ヶ月	御頼申上候口上 吾月十産日之誕生素姓正敷候侍之子、身貧にして母之養み へ相成かたく、道ならね共御見立御頼申上候、吾子捨てる 心之内御推量頼上奉存候、以上 再拝々々 六月日	㊤、㊤40

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
243	嘉永2	1849	705	夜九つ	田川郡	猪野町	真兵衛	表口	男子	3日	二日生まれ 名峰吉	⑨、⑩41
244	嘉永2	1849	620	夜七つ	田川郡	猪野町	古一郎	裏門	女子	9ヶ月	嘉永元年九月六日誕生、八幡宮氏子	⑨、⑩41
245	嘉永2	1849	807	夜八つ	京都郡	上馬田村	安勝寺	玄関口	男子	18日		⑨、⑩42
246	嘉永2	1849	816	晩	中津郡	末江村	卯兵衛	表口	女子	2ヶ月	左之通書付添居申候 奉頼候 一、酉戌六月廿五日生れ 産神八幡宮 右之子筋目よき者ニ御座候へ共母たる者ニ御座候へ共母たる者産の■わにて相果發育相成不申、難渋の身元にて多くの子供の事なれハ人頼にてそでかたく、うへ死にもおよぶべく歎かしく故、御家様の御慈悲を受立御發育願上奉存候、盛長之後者如何様ニ御勉つかい下されても私の心中うれしき無申計、難有御厚恩わすれ申さず重々宜奉願上候 子を捨る無慈悲非道の某 なか秋 大慈の御方様	⑨、⑩42
247	嘉永2	1849	921	夜	中津郡	真郷村	与兵衛	表口	男子	1年2ヶ月	左之通書付添居申候 右者嘉永元年申七月八日誕生ニ而御座候、尤八幡宮之産子、両親之血道聊紛無御座候、以上	⑨、⑩43
248	嘉永2	1849	1025	夜	小倉	田町二丁目	須田孫兵衛厄介須田有隣方		女子	1ヶ月		⑨、⑩43、⑩207
249	嘉永2	1849	1109	夜	田川郡	森原村	杜五郎		女子	3ヶ月		⑨、⑩44
250	嘉永2	1849	1223	夜九つ	田川郡	添田村	法光寺	表	女子	5ヶ月	左之通書付添 住吉八幡宮産子酉八月十八日誕生 一、此子之母親当月上旬ニ死去仕候間養上兼申候ニ付、乍無法先々宜奉願上候 十二月十二日	⑨、⑩45
251	嘉永3	1850	126	夜五つ	中津郡	木井馬場村	即伝寺	玄関前	男子	8ヶ月	左之通書付相添居申候 お願申上口上覚 一、此子去酉五月十日ニ出生仕候所、当月廿一日ニ母親死去仕り候付、種々心配仕候而貰ひちゝいたし候而相そたて見申候得共、何分当春柄今日之過合等も出来不申候ニ付無撓此子を御寺様江御頼申上候間何卒御憐憫ヲ以御助ケ被遊可被下候様、偏ニ奉希候、誠ニ不本意之義ニ御座候へ共是非共世之済水御推察被遊御引上被仰付可被下候、頃首 戌正月廿六日 白川氏 某 御寺様	⑨、⑩46
252	嘉永3	1850	326	晩六つ	小倉	京町四丁目	恒見屋庄助方		女子	2ヶ月	当正月十九日出生との書付	⑨、⑩47
253	嘉永3	1850	320	夜四つ	中津郡	彦徳村	藤五郎	表口	男子	2ヶ月		⑨、⑩47
254	嘉永3	1850	330	夜	上毛郡	宇島		新明町・祝町の辻	女子	2ヶ月	正月廿六日出生仕候、初此親殊ノ外困窮仕其上母親二月中旬死去仕候ニ付、致方無御座候間御家ヲ見立捨可申候間何家御厚志思召ヲ以御助ケ被下候様奉願上候、何れ不慮内乍陰御厚恩ヲ送り可申上存意ニ御座候間宜奉願上候 今月六日 何某	⑨、⑩48
255	嘉永3	1850	408	夜五つ	田川郡	上赤村	正福寺	裏口	女子	3ヶ月		⑨、⑩49
256	嘉永3	1850	421	今朝	田川郡	東川崎村	真崎村役七通り掛け見付け	通り筋島田道島橋ノ木根ニ捨御座候	女子	3ヶ月	八幡宮ニ而産子当正月十三日出生、名やすと■書付尙添添	⑨、⑩49
257	嘉永3	1850	525	夜九つ	田川郡	上赤村	秋永村庄屋一丸郎当村休宅	表口	女子	3ヶ月	願書之事 一、女子壱人 一、氏神はきふね神社 うまれば戌二月初日たんじょうなり 右は御願い上げ申し候 戌五月	⑨、⑩50

給予 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	産先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
258	嘉永3	1850	715	夜五つ	京都府	草場村	医師宗や	表口	女子	1ヶ月	お頼申上覚 一、此子六月廿六日誕生八幡宮之産子由緒正敷者ニ御座候 へ共、生之庭ニ而母死去仕何分養育相成兼候ニ付御家之仁 風を見立御養育御頼申上候、以御慈悲之上御養育被成下置 候ハ、生々世々御厚恩忘却仕間敷候、此之段偏ニ奉願上 候、以上 七月	⑨、⑤0
259	嘉永3	1850	721	夜四つ 透	小倉	米町三丁目	菊野屋孫兵衛 万		女子	1ヶ月		⑨、⑤1
260	嘉永3	1850	722	夜八つ	筑前郡	馬場村	医師見祐	戸口胎置座 の上	女子	1ヶ月	書付書通相添 一、添置候一通 右之女子当月出生仕候處、母親産後殊之外大病ニ而、七月 三日相果候、右ニ付誠ニ当惑ニ相成、大ニ御せ話ニ相成候 得共世人御助け被下候と思召、此上者宜御育被下候様奉願 上候、決而粗末の者ニ而者無御座候、筋目等御氣遣二者及 不申候、右御頼申上度候、以上 七月廿二日 御先方様	⑨、⑤1
261	嘉永3	1850	802	夜	小倉	寛町	越後屋清助		女子	不明		⑨、⑤2
262	嘉永3	1850	809	夜九つ	中津郡	下高坂村	助治郎	屋敷脇（陶 家の者と見 付ける）古 ふごに入れ 捨て	男子	3ヶ月	但書付類無御座候	⑨、⑤2
263	嘉永3	1850	814	夜七つ	田川郡	下津野村	新太郎	門口	男子	7ヶ月	添書 当年正月十八日生、三王宮産子、母無抱貧儀ニおよひ、御 たすけ可被下候、何卒々々御願可申上候、頓首 月日	⑨、⑤3
264	嘉永3	1850	820	暁七つ 半	企救郡	中曾根村	孫三郎	稲家の口	男子	3ヶ月	外ニ添物無御座候	⑨、⑤3
265	嘉永3		816	夜九つ	上毛郡	柳瀬村	庄平	表口	男子	10日		⑨、⑤4
266	嘉永3	1850	811		田川郡	上糸田村	傳内	表口	男子	1ヶ月	但、此男子両親ニ別、其上ニ付、貴公様へ御拾上可被下候 様、重々奉願上候、産神者八幡宮、七月六日出生と書付相 添届申候	⑨、⑤4
267	嘉永3	1850	822	夜	小倉	米屋町二丁目	中津屋普六方		男子	不明		⑨、⑤4
268	嘉永3	1850	820	夜七つ	上毛郡	岸井村	徳善寺	本堂	女子	3ヶ月	但当月八日出生書付添	⑨、⑤5
269	嘉永3	1850	819	夜四つ	京都府	行幸村	善次郎	表口置座の 上	女子	3ヶ月	御免 一、安部氏女子巻入五月十三日誕生、右者連合相別れ、殊 更凶年ニハ相成、何分養育之義出来兼候間、何卒不便と思 召御方御座候ハ、拾候上養育被成下候得者生々世々之御恩 之程海山にも難有義、右之段一紙相添置申候如件	⑨、⑤5
270	嘉永3	1850	819	夜九つ	京都府	鶴崎村	方領惣五郎方	表口	男子	8ヶ月	奉願口上覚 乍恐奉願候、此子儀去ル酉十二月六日誕生仕候所、当五月 中旬母親死去仕候、是迄養育仕候得共近來まずしく相暮候 間、養育出来不申左候へハ此子上死ニも相成候ニ付、御当 家様へ捨申候、御慈悲ニ而御拾上被成可被下候様一偏ニ奉 願上候、以上 嘉永三年戌七月 某 何様	⑨、⑤6
271	嘉永3	1850	822	夜	小倉	米町二丁目	中津屋普六方		男子	不明		⑤6

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
272	嘉永3	1850	912	夜九つ	田川郡	中糸田村	伯林寺	御堂縁	女子	13日	添書 御頼状 然ハ母生おとし三日ニ死去仕候ニ付よんとくなく此子老 人御頼申上候、生れて今日迄十三日ニ相成申上候、右者 此子老人御たすけ被成可被下候、奉頼候 九月十二日 御親子様	⑨、⑥57
273	嘉永3	1850	918	夜六つ 半	小倉	魚町四丁目	米屋惣吉方		男子	4ヶ月	当五月廿三日出生と書付添え	⑥57
274	嘉永3	1850	927	夜	田川郡	後藤寺町	孫兵衛	店口	女子	1年		⑨
275	嘉永3	1850	1002	夜五つ	田川郡	夏吉村	基作	表口	男子	1年		⑨、⑥57
276	嘉永3	1850	1005	夜九つ	企救郡	長浜浦	伴作	戸口	男子	1年7ヶ月		⑨、⑥58
277	嘉永3	1850	1005	夜	京都郡	草場村	源吉	表口	女子	1ヶ月	添書 去る九月十六日出生の女子、故有て養育致候事甚以六ヶ敷 御座候故、無提御当家ヲ見立真角之次第、偏ニ宜頼上候、 猶又決而粗末筋条ニ而無御座候、氏家因正しきものニ而御 座候へ共、右之次第第二而名のり候事叶かたし、此段宜御推 察頼上候、以上 十月五日	⑨、⑥59
278	嘉永3	1850	1001	夜四つ 邊	京都郡	草場村	兼太郎	表口	女子	1年2ヶ月	添書 当年八月十五日出生ニ御座候処、何いやしき物の子ニ御座 候はん所、何卒々々宜敷御頼申上候、以上 御氏様 某 右書付水色倫子ニ松竹梅之縫入ふくさニ包、枕ニ為仕居申 候	⑨、⑥59
279	嘉永3	1850	1116	夜	小倉	立町	亀屋勘八		女子	不明		⑥59
280	嘉永3	1850	1111	夜九つ 半	企救郡	田野浦町	喜久田徳右衛 門方	軒下	女子	1ヶ月		⑥60
281	嘉永3	1850	1121	夜九つ	企救郡	金田村	市太郎	戸口	女子	6ヶ月	五月廿九日生れ、母親十月八日相果て申し候間、女子老人 御助け下さるべく候様頼み奉り候	⑥60
282	嘉永3	1850	1208	夜	企救郡	湯川村	開善寺	門前	男子	1年6ヶ月	去る酉六月生まれ、高倉の氏子と書付	⑥61
283	嘉永3	1850	1207	夜七つ	京都郡	上里田村	利助	稲家	女子	8ヶ月	但戌四月十八日よろしうたのむと申書付添居申候	⑥、⑥61
284	嘉永3	1850	1209	夜	中津郡	金屋村	貞右衛門	軒下	男子	10ヶ月	辱も弁えず男子老人御慈悲の内様は一筆書添え捨て置き申 し候、元八幡宮の氏子にて、去る二月四日誕生仕り候後母 死別仕り候、致し方も御座無く候故此の如く御座候、何 卒々々御たすけ下さるべく候	⑥62
285	嘉永3	1850	1207	夜	築城郡	湊村	根兵衛	背戸之合	女子	1年		⑥、⑥62
286	嘉永3	1850	1214	夜九つ 半	田川郡	鏡山村	卯助	表口	女子	2年	産神八幡宮 申歳十二月三日生、此小児不賤者ニ候得者貧窮差廻捨居申 候間、此先御養育之程偏奉頼候	⑥、⑥63
287	嘉永3	1850	1221	夜四つ	企救郡	湯川村	古右衛門	裏口	女子	1年6ヶ月	右ニ書付相添居申候 嘉永二酉六月二十五日吉田氏をえひをや取りはてたのみ上 候	⑥、⑥63
288	嘉永3	1850	1215	夜五つ	田川郡	下津野村	正徳寺	本堂之縁	男子	11ヶ月	外ニ添書 一、熊野三拾六社之内の氏子ニ而御座候 戌正月十五日生 此子御助け可被下候	⑥、⑥64
289	嘉永3	1850	1225	夜四つ	田川郡	東夏吉村片追		片追の追分 の際へ捨 火番の者が 見付ける	女子	9ヶ月	外に何さえ書付等御座無く候	⑥、⑥64
290	嘉永3	1850	1227	夜	京都郡	長木村	仕八	表口	女子	1年4ヶ月	左之通書付添 一、酉年八月八日で御たのみまする	⑥、⑥65
291	嘉永4	1851	109	夜四つ	中津郡	羽根木村	與助	表口	男子	10ヶ月	左之通書付添居申候 去戌三月四日端生仕、大神宮之産子重松氏	⑥、⑥65

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
292	嘉永4	1851	113	夜五つ	田川郡	下落合村	助右衛門	戸口脇	女子	1年	一、女奄人 戌正月十四日産生、御家見立て捨て置き仕り候所、御慈悲 御拾い上げ下さるべく候、宜しく頼み上げ奉り候 亥正月 落合村伊勢口助右衛門様	㊸66
293	嘉永4	1851	104	夜	全秋郡	矢山村	安右衛門	座敷縁之下	女子	3ヶ月		㊸、㊸67
294	嘉永4	1851	212		小倉	賀町式丁目	蔵本市右衛門 方		女子	不明		㊸、㊸67
295	嘉永4	1851			不明				女子	3ヶ月	一、女子奄人、戌亥付出生、此の子八幡宮の氏子にて、ゆ い緒正しき者に御座候、然る所余儀無く脇方へ故障筋出来 仕り、道ならぬ事ながら、御家様御慈悲の義兼ね々々承り 及び罷り在り候間、御すがり申し上げ、此の子を捨て申し 候、何卒何卒奄人の助命御たすけ遊ばわし、おん拾い揚げ 下さるべく候、何卒何卒御じひを以て世間御触出しに相 成らず様、恐れながら御いつくしみ万々願ひ上げ、右	㊸68
296	嘉永4	1851	118	夜九つ 過	田川郡	金岡村	與平後家	馬屋の口	女子	1ヶ月	書付巻通添え 御見立て御願ひ申し上げ候、女子奄人御助け成され下さ るべく候、戌十二月十七日生まれ、荷々よろしく	㊸68
297	嘉永4	1851	118	極早朝	田川郡	下中元寺村	嘉八	大戸口	女子	1年1ヶ月	書付添え 但し、酉十二月廿七日うまれ、氏神天満宮、母にしなれ、 且つ戌六月水そんに相かかり申候に付、甚だ以て二方人 子共奄人方奄人三ツきよ代々小共手に付、今日は甚だ以 てかつ命におよび申し候所、奄人御ひろい上げ下さるべく 候、此の子に何分の義申すまじく候、若し又御公儀へ御み みに入り申し候はば申しわけも御座無く候に付、此の書付 の通り、よって斯の如くに御座候、以上 嘉永四年亥正月十七日	㊸69
298	嘉永4	1851	126	夜	中津郡	国作村	源兵衛	表口の庭を 着せ不快御 座候て、翌 朝戸口を明 候所右之男 子捨	男子	6年		㊸69
299	嘉永4	1851	128	夜五つ 半頃	田川郡	秋永村	武七	門口	男子	2年	左の通り書付添え 英彦山流氏子、酉年弥生産、当正月父親死去に付、年柄故 困窮故母奄人中々力に及ばず、其の上奄人の老母を持ち、 中々養育成り兼ね、道ならぬとも御家頼み申し候間、一人 御助け遊ばされ下さるべく候 夕暮の嵐計りと母の消しすて 世をなりくも暮らすものとは 御恩にて万一人と成り候節は、此の分よくよく御さとし、 御おんわすれざるよう御もふし願ひ上げ候、かしく	㊸69
300	嘉永4	1851	209	夜九つ	全秋郡	頂吉村	與三郎	表口	男子	11ヶ月	うまれ候てちちも無く、めし計り 只今にては三ぜんたべ 嘉永三戌三月廿日生れに御座候 宇佐美継次郎 二月十日 一、凶年に付、親病氣に付、極々難渋に御座候ゆえ、御取 りあげ下され、あとあと迄も御おんはわずれまじく、これ にはきがえもいっこう御座無く、此のままにて候間、御ひ ろい上げ下さるべく候、子はただの者の子にちがいはこれ 無く候間、御育て下さるべく候、宜しく御願ひ申し上げ 候、書付添え置申し候	㊸70
301	嘉永4	1851	210	夜八つ	築城郡	惟田村	文四郎	表口	女子	1年		㊸71

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
302	嘉永4	1851	209	夜	田川郡	柿下村	弥太郎	表口	男子	3ヶ月	但し、書付添え 八幡宮の産子大谷氏 戌年十一月十日誕生、亥正月廿九日母死に、たすけ□□□ この子をひろいあげ、よろしくたのみ申し候	⑧71
303	嘉永4	1851	225	夜八つ	中津郡	国作村	九一郎	裏口	男子	3ヶ月	左の通り書付添え 申し上げ候、此の子と申す義は戌十二月十日産にて御座候 て、母親死致し候、甚だ難儀に御座候所不憫に思し召 し、此の子御育て下さるべき様御願ひ申し上げ候、私義も 此の子御世話成され下さる上は、かげからも見ては懐かし み申し候、一時に御頼み泰り申すべく候、以上 二月十九日夜 此の子名股太郎と申し候	⑧74
304	嘉永4	1851	308	夜九つ	京都郡	長谷寺村	他一	表口	女子	1ヶ月	左の通り書付添え 申し上げ下され御たのみ、このご御たすけ、おやなし子あ り、 亥正月十五日に戌十一月廿四日誕生、正八幡宮の氏子	⑧74
305	嘉永4	1851	328	夜九つ	田川郡	上真崎村	庄屋勘助	戸口	男子	3ヶ月	書付類御座無く候	⑧75
306	嘉永4	1851	401	夜	田川郡	上野村	徳次	裏口	男子	3ヶ月	書付は御座無く候	⑧75
307	嘉永4	1851	321	夜	田川郡	真木村	泉寺	本堂廊下	女子	3ヶ月	書付類御座無く候	⑧75
308	嘉永4	1851	405	夜	筑城郡	東八田村	治平	表口	男子	1年11ヶ月	添え書付写し 一、男子老入 但し、八幡宮氏子、酉四月廿六日出生 右は此の子男親御座無く、幼少の兄弟共多く、養育方出来 申さず、右に付御宅へ故有るを見立て捨て候間、御慈悲を 以って御拾ひ揚げ下され候はば有り難き仕合せに存じ奉り 候、右御願ひ申し上げ度斯の如くに御座候、以上 亥四月	⑧76
309	嘉永4	1851	405	夜五つ 過	中津郡	今井村	勘七	表口	男子	2年1ヶ月	左の通り書付添居申候 一、八幡宮様 氏子也 嘉永貳酉二月廿三日生	⑧、⑧76
310	嘉永4	1851	410	夜五つ 前	田川郡	堀村		阿弥陀追往 来 弥左衛門見 付	男子	2年		⑧77
311	嘉永4	1851	413	夜四つ	中津郡	筑碕村大崎	庄屋彦右衛門	表口	女子	3ヶ月	左の通り書付添え居り申し候 このこは若みやのこなり、正八幡のうじこ、なんぎにひか されてすつる、御たすけ下さるべく候	⑧77
312	嘉永4	1851	409	夜九つ 時分	田川郡	田原村	彦次郎	表口	男子	9日	一、八幡宮産子男子 嘉永四亥四月出生、百姓倒れ	⑧77
313	嘉永4	1851	428	夜	田川郡	(堀村)	横四郎兵衛	自宅裏口	男子	2年		⑧78
314	嘉永4	1851	427	夜鶏鳴 時	上毛郡	四郎九村	全平	表口	女子	10ヶ月	左の通り書付添え 書添の覚 一、女子老入 去る戌六月十七日出生 当年二才 右は、此のご母親病死仕り發生致し難きに付、成らず筋事 には存じ奉り候えども御当家を見立て捨子致し候間、何卒 御養生の程希い上げ奉り候、尤も家名の義はこれ有り候え ども、右体の仕合いに御座候えども筋目記し難く御座候 間、此の段御推察下さるべく候、此の子出生の時分付け名 も御座候えども、新たに改名成され下さるべく候、決して 穢らわしき者に御座無く候故、捨て置き候も後悔のみにて 候えども、何分にも宜しく願ひ上げ奉り候、以上 嘉永四年亥四月 何某 御当家様	⑧78



拾子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	拾先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
315	嘉永4	1851	416	夜九つ	中津郡	稲置村	勘之助	表口	女子	1年	書付等も御座無く候えども	㊸79
316	嘉永4	1851	414	夜五つ	築城郡	上築城村	新兵衛	表口	男子	4年	御頼み書 御頼み申し上げ候、御面倒ながら男子吞入捨て申し候、何卒御ひ ろい上げ下さるべく候、偏に御頼み申し上げ候、然る所氏神社八 幡宮、未年生子にて御座候、母親先月廿五日相はて申し候ゆえ、 何分私当わく仕り候て、貴所様へ御すがり、此の子吞入御たすけ 下さるべく候様、偏に願ひ上げ奉り候、私裁決して口口成る者にて は御座無く候に付、貴所様を御親様として御頼み申し候、御面倒な がら此の度の義はよろしく御聞き通し下さるべく候、私裁も草ば のかげより御礼申し候所、御頼みまで此の如くに御座候、以上 卯月吉日 私より 御親様 何分そえ物御座無く候、はだかにてすて申し候 はづかし御座候	㊸80
317	嘉永4	1851	423	今朝	中津郡	真器村	金兵衛・市郎	兩人居家雨 落ち堀へ捨 て御座候	女子	1年3ヶ 月	左の通り書付添え居り申し候 覚 一、年式歳、此の子戌正月出生、氏神社貴船大明神生姓也 右は男親へはなれ糞い方出来成り難きに付、御慈悲を以つ て此の子御そだて下さるべく候様、偏に願ひ上げ奉り候、 以上 亥二月口口 何がし親 御家主様	㊸80
318	嘉永4	1851	424	夜九つ 半頃	田川郡	井城村	藤三郎		女子	1年7ヶ 月	左の通り書付添え との年女 三才 九月五日たん生 名ふしの うぶしん日見宮	㊸81
319	嘉永4	1851	504	夜	田川郡	伊方村	正蓮寺	本堂前	男子	2年		㊸、㊸81
320	嘉永4	1851	616	晝七半	小倉	大門町	森口辰次郎	戸口先	女子	2ヶ月		㊸、㊸82
321	嘉永4	1851	720	夜	中津郡	福富村	南因寺		男子	1ヶ月	六月十九日出生と書付これ有り	㊸82
322	嘉永4	1851	1111	夜	京都郡	河田村	東御寺内		男子	10ヶ月	当正月九日誕生と有之候	㊸、㊸83
323	嘉永5	1852	212	夜六つ	小倉	笠町	亀屋勘八郎	戸口先	男子	2年		㊸83、㊸ 274
324	嘉永5	1852	221	晝	金保郡	中賀村	佐右衛門方		男子	4年		㊸277
325	嘉永5	1852	1214	夜	中津郡	稲置村	真光院		男子	不明		㊸
326	嘉永6	1853	408	夜	田川郡	添田村	知忍寺	庫裏裏表口	男子	9ヶ月		㊸
327	嘉永6	1853	1229	夜	田川郡	上野村	定善寺	表口	男子	1年		㊸、㊸84
328	安政1	1854	1008	夜	不明		再楽寺	門内	女子	5ヶ月	当四月廿八日出生と書付有之候	㊸、㊸84
329	安政1	1854	1201	夜四ツ 過	中津郡	稲置村	常市	表口	女子	4ヶ月	左の通り書き付け添え 寅八月十日生れ おさな名 八幡宮氏子 おせん	㊸85
330	安政1	1854	1214	夜九つ	中津郡	内堀村	社家吉原日向 方	玄関口	女子	1ヶ月	一札添書覚 一、十一月十三日出生 改名 芳 近來不仕合せに付、猶又子供数多く御座候間、一向致し方 御座無く候、右につき尊公様御助けを以て御そだて遊ば され下さるべく候、平に有り難き仕合せに存じ奉り候、此 の段願ひ上げ奉り候、以上 嘉永七寅十二月	㊸86
331	安政2	1855	203	夜	土分		篠崎御屋敷御 家来古高助助 方		女子	7ヶ月	作寅年六月廿日出生と書付有之	㊸、㊸ 86、㊸43
332	安政2	1855			中津郡					不明		㊸29
333	安政2	1855	121	夜	田川郡	川崎村	光通寺		女子	14日	当正月七日出生と書付有之	㊸、㊸ 86、㊸41
334	安政2	1855	212		中津郡	鎌野村	傳兵衛			不明		㊸

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
335	安政2	1855	225	夜四つ	京都府	雨窪村	清源寺	表口	男子	10日	添え書付の写 卯二月十六日 但し、此の書付懐に入れ居り申し候	京88
336	安政2	1855			不明				捨子	不明		京56
337	安政2	1855	305	夜	筑前府	松江村	浄園寺	本堂軒下	男子	1年2ヶ月		京88
338	安政2	1855			上毛郡		某ノ寺		捨子	不明		京82
339	安政2	1855	801	夜	不明		西玄禮		女子	1年		京89
340	安政2	1855			京都府	二塚村			捨子	不明		京188
341	安政2	1855			金沢府	恒見村	光園寺	門内	女子	5ヶ月	当二月廿四日出生と書付相添	京89、京204
342	安政2	1855	826	夜	小倉	田町五町目	船頭町元永屋 為三郎所持明家	戸口	女子	5ヶ月		京90
343	安政2	1855			不明					不明		京212
344	安政2	1855	1220	夜五つ 過	上毛郡	八屋村	勝三郎	表戸口	男子	9ヶ月	書付 一、童名 水性勝次郎 安政二乙卯三月六日誕生 右は男子奄人、内々御譲り申し候上は、永々御養育のほど 偏に御家見立て御頼み申し上げ候、家血筋の義につき懈怠 御座無く候間、御厄介ながら末世まで御願ひ申し上げ候、 其のため添書件の如し 十二月廿日 両親 本屋勝三郎殿 好身	京91
345	安政3	1856			他郡				捨子	不明		京361
346	安政3	1856			中津郡				捨子	不明		京371
347	安政3	1856			他郡				捨子	不明		京424
348	安政3	1856			上毛郡		寺方		捨子	不明		京451
349	安政3	1856	308	夜	筑前府	馬場村	来迎寺		男子	2ヶ月		京91、京23
350	安政3	1856	427	夜六つ	筑前府	馬場村	平作		女子	1年5ヶ月	左の通り書付衣類添え居り申し候 一、賀茂明神氏子 産名しけ 寅十一月十八日誕生 一、形付古胸当巻 一、緋布晒袖無し巻 一、浅黄縞縫ぎはぎ袖無し巻 一、紺茶縞古拾巻 一、かすり拾巻	京92
351	安政3	1856	419	朝未明	筑前府	岩九村	傳三郎	屋敷品のほし	男子	1ヶ月	添書付に 頼み奉る一札の事 一、拙子こと故有り浪々の身と生り候のところ、老親男女子多数候て 且尊生活乏しく、然るに又此の子生まれ、時に妻七日後死去、途方に 暮れ候のところ、小児養育相成り難くに付、悲しくも御政道に背き 止むを得ず御頼み申し候、御恵みを添えられ御養育成し下され候は ば、生々世々の大恩争これに過ぐべからず候、敬白 辰卯月日 何某（花押） 御両人様 三月廿三日小児誕生、四月廿八日要死去 小児へ 恨むなよ、親りの水は泪にて かきおくも當の業ぞ、恥しき 々 ひとこしは譲りてこそと思ひしに 名残りのころもきぬ々々受け	京92
352	安政3	1856			中津郡				捨子	不明		京521
353	安政3	1856	623	夜璃鳴 時	上毛郡	四郎丸村	又四郎	表口	女子	1ヶ月	外に書付類等御座無く候	京93
354	安政3	1856			他郡				捨子	不明		京573
355	安政3	1856			田川郡				捨子	不明		京667
356	安政3	1856	1101	夜八つ 過	上毛郡	東下村	庄屋末松恵左 衛門	門口	男子	2ヶ月		京94
357	安政3	1856	1028	暁	小倉	西紺屋町	平井辰利兵衛 方		男子	7ヶ月		京94

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
358	安政4	1858	111	早朝	京都府	与原村		南はつれ往 来脇立肥の 所	男子	3年		㊥12
359	安政5	1858	205	夜	中津郡	大橋村	浄蓮寺	門内	男子	2ヶ月		㊥
360	安政5	1858	806	夜八つ	京都府	上片嶋村	玄貞	門先	男子	1年6ヶ月		㊥46
361	安政5	1858	1222	夜	田川郡	上弓削田村	佐竹丈右衛門 方		男子	不明		㊥20
362	安政5	1858	1222	夜	田川郡	上野村	勘助方		男子	不明		㊥20
363	安政6	1859	121	夜	田川郡	伊方村	正蓮寺		女子	不明		㊥20
364	安政6	1859	202	夜	京都府	尾倉村	菊七方		男子	不明		㊥20
365	安政6	1859	9999		中津郡	純命院村	七平方		男子	不明		㊥20
366	安政6		209	夜	企救郡	篠崎村	新次郎方		女子	不明		㊥20
367	安政6	1859	109	夜	京都府	上久保エタ	権兵衛方		女子	不明		㊥20
368	安政6	1859	209	夜	企救郡	篠崎村上ノ原 続き	新次郎抱え持 ち居宅		女子	1ヶ月		㊥95
369	安政6	1859	429		上毛郡	宇崎		社倉御蔵所 前往茶碕	男子 死骸	1ヶ月	<p>添世 御願い申し上げ候覚 一、男子老人 八幡宮氏子 右は当三月廿八日出産仕り、今月五日母親死去致し候に 付、何分養育の仕方御座無く候故、よんどころ無く御家 を見立て御願い申し上げ候、何卒御慈悲を以って養育仕らせ くれ候はば有り難き仕合せに存じ奉り候、御厚恩の程は陰 より送り申すべく候間、右の段偏に希い上げ奉り候、右添 世一札件の如し 月日</p>	㊥96
370	安政6	1859	505	夜八つ	上毛郡	八屋浦	浪右衛門	表口	男子	3ヶ月	<p>左の通り書付添え 覚 一、八幡宮氏子 名 岩之助 未二月十二日産 女親三月廿一日に死去仕り候、男親老人御座候えども、老 人にては世話出来申さず候間、御拾い揚げ御世話成し下さ るべく候様御願い申し上げ候、以上 未五月五日</p>	㊥97
371	安政6	1859	616	夜	田川郡	上赤村	正福寺寺内西 念と申す者方	軒下	女子	1年1ヶ月	去年五月二日産と書付	㊥97
372	安政6	1859	1212	夜七つ	田川郡	堀村	判蔵	表口	女子	5ヶ月	八万宮うじこ、七月廿六日うまれ、片おやなきうれゆえよ ろしくたのみ上げたてまつる	㊥98
373	万延1	1860	326	夜九つ	上毛郡	八屋村	医師浦野玄明	表戸口	男子	1ヶ月	当二月廿六日誕生と認め御座候書付添え居り申し候	㊥98
374	万延1	1860	605	晩	企救郡	納杓田村	光照寺	本堂	男子	不明		㊥、㊥ 99、㊥
375	万延1	1860	827	夜	小倉	船頭町	大坂屋権四郎	横丁戸口	女子	1ヶ月	申七月四日出生と書付有之	㊥
376	文久1	1861	222	夜	中津郡	大橋村	兵八	表口	男子	不明		㊥
377	文久1	1861	321		小倉	京町四丁目	油屋忠兵衛		男子	18日	当三月三日誕生	㊥、㊥ 100
378	文久1	1861	418	夜暮六 つ	上毛郡	四郎九村	和助	表口	女子	2年	外に書付類御座無く候	㊥100
379	文久1	1861	424	晩	上毛郡	八屋村	三七郎抱え持 ちの明家		女子	3年	外に書付類御座無く候	㊥514、 ㊥101
380	文久2	1862	120	夜	京都府	長吉寺村	直助方		女子	2ヶ月	<p>外二書付 酉十一月十一日丑ノ■へ生 中野氏 親ハ片親 今日</p>	㊥

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
381	文久2	1862	201	夜九つ	中津郡	金井村	勝五郎	表口	女子	2ヶ月	左之通書付添 一、御願申上候事 然者酉十一月廿日生候処、母をやこはなれなん十二つキ御 じひに御そたて被下候様御願申上候、八幡宮之氏子ニ御座 候 戌二月朔日	㊟
382	文久2	1862	399		築城郡	高塚村	真光寺	裏門之内	男子	6ヶ月	外ニ書付等も無御座	㊟
383	文久2	1862	406	夜九つ	中津郡	行幸村	万次郎	表口	女子	9ヶ月	酉七月二日出生 産神山王宮	㊟
384	文久2	1862	409	夜八つ	企救郡	母原村	惣右衛門方		女子	7ヶ月	左之書付添 此度御宅を見立御願申上候、此女子身之上極々之わけから に寄そたてかた相成かたく、誠ニ当惑ニおよひ数々心配致 候へ共いたし方無御座候ニ付、前段之通御宅を見立■行御 願申上候、尤去酉八月廿四日生ニ姪子社之産子ニ而御座 候、産名有之候へ共、思召次第改名可被下候、何卒々々御 じひニ而■行之段一偏御願申上候、有難仕合ニ奉存候、以 上 戌四月吉日	㊟
385	文久2	1862	610	夜八つ	中津郡	花縣村	彦右衛門	軒下	女子	2ヶ月		㊟
386	文久2	1862	718	夜	築城郡	東八田村	文四郎		女子	3ヶ月	産神八幡宮 当四月出生未タ名ヲ附不申 右者此子母親死去いたし、是迄もらい乳仕候へ共、何分ニ もそだて時不申、右ニ付御人物御家柄ヲ見立捨置候間、御 じひを以御取上可被下候、右一札如件 文久二戌七月	㊟
387	文久2	1862	729	夜九つ	中津郡	金井村	勝五郎	表口	男子	2ヶ月	書付類無御座候	㊟
388	文久2	1862	819	夜	中津郡	稲堂村	清太郎	表口	男子	3ヶ月	左之通書付添居申候 五月二日生 氏神ハ 八幡宮 名ハ 鶴松 ヰ	㊟
389	文久2	1862			企救郡	津田	平次郎自宅		女子	1年		㊟718
390	文久2	1862	1205	夜	中津郡	行幸村	幸七方		男子		書付添	㊟
391	文久3	1863	120	夜八つ	田川郡	添田町	法光寺	本堂縁	男子	2ヶ月	一、八幡宮 但し、うまれ戌十二月、女おやがしんで候、ふとら かしくされ候、以上	㊟102
392	文久3	1863	608	曉七つ	上毛郡	宇碓	眞屋高之助	戸口	女子	不明		㊟102
393	元治1	1864			企救郡	紙園町	彦右衛門方		女子	不明		㊟177
394	慶応3	1867	1005	夜八つ	田川郡	下今任村	庄屋木村順治 方	稲家軒下	男子	1ヶ月		㊟103
395	慶応3	1867	1010	夜九つ	築城郡	上築城村	方頭定右衛門 方	表口	女子	5ヶ月	左の通り書付添え 一、此の子当卯五月二日出生に御座候処、間もなく父病死 仕り、何分子供数御座候間養育仕り兼ね候間、御家がらと 見受け申し候間、何卒御ひろい上げ下さるべく候はば有り 難き仕合せに存じ奉り候、此の段偏に々々御願ひ申し上げ 候 一、氏神は小倉伊藤豆宮に御座候	㊟103
396	慶応3	1867	1206	夜	中津郡	大橋村	仲平	裏口	女子	11ヶ月	外に書付左の通り 一、私義難決につき見立て相すて申し候処、請人の上は名 利合申候、御産神様は妙現様にて御座候、卯正月廿二日 生、偏に頼み奉り候 卯十二月六日	㊟104
397	慶応4	1868	304	夜	京都郡	行幸村	勘三郎	裏口	女子	1年	御願ひ申し上げ候 一、女子奄人、去る卯五月廿二日出生致し候、此の度御家 を見立て捨て仕り候間、何卒養育の程御願ひ申し上げ候、 以上 八幡宮氏子	㊟105

捨子 番号	年号	西暦	月日	時刻	郡	村町	捨先	場所	性別	出生後 月数	書付	出典
398	慶応4	1868	U401	夜九つ	田川郡	下伊田村	右衛門方	表口	女子	4ヶ月	左の通り書付添え 八幡宮氏子、正月十五日生まれ、母おやしきよ致し候に 付、何卒御あわれみをくわえ、よろしく御たのみあげ申候 御いえさま	⑩105
399	慶応4	1868	U499		田川郡	下赤村	仕平	表口	男子	6ヶ月		⑩106
400	慶応4	1868	407	夜	筑城郡	松江村	上園寺内領口 方	表口	女子	1年		⑩106
401	明治1	1868	816	夜	田川郡	上今任村	久四郎	表口	男子	5ヶ月		⑩106
402	明治1	1868	824	夜	中津郡	真賀村	興吉	表口	男子	3ヶ月	御願い状の事 一、男子孝入辰五月誕生、正八幡宮産子、其の後此の子母 不縁に付、養育相成り難く候に付、よんどころ無く捨て置 き申し候間、幾末長々御世話の程偏に希い奉り候、毛頭筋 目いやしきものに御座無く候間、よろしく頼み奉り候、以 上 八月廿四日	⑩107
403	明治1	1868	815	夜	中津郡	辻坂村	才兵衛	座敷縁下	女子	1ヶ月	書付類御座無く候、以上	⑩107
404	明治1	1868	901	曙	中津郡	天生田村	村下土手筋出 家、長平・四 平四人方屋敷 境の前	川端松木へ 藪釣り下 げ、其の中 へ入れこれ 有り候	男子	1ヶ月	内書の事 一、氏神天満宮也 八月十三日生れ、父親貳拾才、母親これ無く、此の段申し 上げ兼ね候えども、以来宜しく御頼み置き候事也 喜村	⑩108
405	明治1	1868	1115		田川郡	升田村	中村啓右衛門	前戸口	男子	4ヶ月	産神大神宮、七月十二日出生と書付添え	⑩108
406	明治4	1871	430	夜七つ	上毛郡	狭間村	明照寺	裏門口	女子	5ヶ月	添書写し 一、生月十一月出産 一、父三好氏 一、母高木氏	⑩108
407	明治3	1870	714		上毛郡	川原田村	曙方彦九郎方		女子	1年		⑩109
408	明治3	1870	208	夜五時 前	中津郡	大橋村	横丁方人見ノ 下		女子	1年		⑩139